

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 國學院大學図書館蔵「清輔本金葉和歌集」の解題と翻刻

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 畠山, 大二郎 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00002379">https://doi.org/10.57529/00002379</a>

# 國學院大學図書館蔵『清輔本金葉和歌集』の解題と翻刻

畠山 大二郎

## はじめに

本稿では、本学図書館に所蔵されている三本の『金葉和歌集』のうち、『清輔本金葉和歌集』を翻刻し、その特徴について明らかにしたい。『清輔本金葉和歌集』（以下「清輔本」）は、國學院大學図書館のホームページ内のデジタルライブラリーに画像が公開されている。清輔本は、流布本である二度本系の中で最も古くに書写されたとされ、さらに全巻にわたって数多の勘物がある。このことから本書の資料的価値が高いとされる。先に菊地仁氏が清輔本について解説しているが、<sup>(1)</sup>本文の翻刻まではなされていない。本稿は、本文と勘物をともに掲載する形で翻刻し、勘物について検討を試みる。

## 【書誌】

列帖装二冊。表紙は金襴薄茶亀甲地唐花紋、縦二六・八糎、横一四・七糎。外題は、上冊表紙の朱題簽に「金葉倭詞

集全」とあり、縦一四・二糎、横三・〇糎。見返しは、銀砂子に金箔散らしで、表紙から剥離している。表紙の剥離した裏側には、「上 すみつき 九十三まい」の付箋（縦八・三糎、横四・〇糎）が貼付されている。塗箱の内側には、「金葉和哥集 定家卿息  
為家手跡」と書かれた短冊がある。奥書・蔵書印なし。伝藤原為家筆、書写年代は鎌倉中期とされる。一九八二年に重要文化財に指定された。

### 『清輔本金葉和歌集』の本文

本書が「清輔本」と呼ばれた経緯については、「まったく不明<sup>②</sup>」とされている。

書写者とされている藤原為家は、『国史大辞典<sup>③</sup>』によれば、建久九年（一一九八）誕生、建治元年（一二七五）五月一日没。融覚、中院禅門、民部卿入道とも呼ばれた。父は藤原定家、母は藤原実宗女。侍従、権中納言などを経て、正二位権大納言、民部卿に至った。温和な性格で、順徳天皇に寵愛され、和歌・蹴鞠にすぐれる。『為家卿千首』、『洞院摂政家百首』などの他、『続後撰和歌集』、『続古今和歌集』の撰定を命ぜられる。泉三家分立の因を作った。家集に『大納言為家集』、歌学書に『詠歌一体』『万葉集佳詞』、注釈書に『古今序抄』がある。物語歌撰集『風葉和歌集』の撰者ともされる。

清輔本の本文は、二度本第三類本（精撰本）とされている<sup>④</sup>。『金葉和歌集』の本文系統については前号において記しておいたが<sup>⑤</sup>、本書の総歌数は六七三首であり、二度本第三類本の善本とされるノートルダム清心女子大学正宗文庫蔵伝二条為明筆本に近い。

## 『清輔本金葉和歌集』の勸物

清輔本の勸物は、「詞書や歌に関する頭注と、作者に関する脚注」<sup>(6)</sup>とに分かれており、菊地仁氏が翻刻を行っている。<sup>(7)</sup> 菊地氏は清輔本『後拾遺和歌集』の勸物と、本書の勸物を比較し、その二つが同一系統のものであると述べられ、本書の勸物も清輔自身あるいはその周辺に源を発するものであろうとする。菊池氏の説は、根拠も明らかにされており首肯すべきものである。しかし、勸物の中には、例外もみられることから、本稿では両作品が一致しない例を検証し、『清輔本金葉和歌集』勸物の特徴を考えたい。

本書と比較する清輔本『後拾遺和歌集』は、陽明文庫蔵伝藤原為家筆『後拾遺和歌抄』一帖であり、藤本一恵氏の解説がある。<sup>(8)</sup> また、『後拾遺和歌抄』勸物の本文は、上野理氏の翻刻<sup>(9)</sup>による。

まず、従来指摘されている『後拾遺和歌抄』勸物との一致である。この点に関しては菊池氏が詳しく検証されているので、特筆すべき点のみを挙げる。

良暹法師に関して、『清輔本金葉和歌集』と陽明文庫蔵伝藤原為家筆『後拾遺和歌抄』の勸物を比較してみると、

金葉… 山法師／祇園別當 父／不詳 母實方／朝臣家女房 童名号白菊

後拾遺… 祇園別當、父不詳、母実方女童白

とあり、両方とも良暹法師の母の童名を「白菊」とする。これは、他の文献には確認できない情報であり、両作品の勸物の一致は、両作品の原本が清輔周辺で作られた可能性を示唆するものである。

また、藤原顕綱については、

金葉… 前讚岐守正四／位下参議正／二位兼隆卿／二男母弁乳母

後拾遺… 前讚岐守正四下、参議兼隆男、母弁乳母。

という勘物になつてゐる。『尊卑文脉』によれば、頭綱は兼経の三男とされ、通説になつてゐる。<sup>10</sup> 二つの勘物のほうが誤記と考えられるのである。このように二つの勘物が揃つて同じ誤りを記していることから、両作品の勘物の関係が密接であることを示している。

ところが、両作品の勘物がつねに一致するわけではない。藤原通宗に付された勘物は、

金葉… 若狭守正四位下／前大貳従三位／経衡卿一男母／前筑前守高／階成順女

後拾遺… 若狭守正四下、懐平卿一男、母大甫女。

となつてゐる。通宗は、『尊卑文脉』には大宰大貳藤原経平の男となつてゐる。『清輔本金葉集』の場合は「平」と「衡」とが同音であり、経衡の女婿が通宗であつたために混同したのかもしれない。<sup>11</sup> 一方の『後拾遺和歌抄』は、通宗の曾祖父が懐平であり、そこから生じた誤りと考えられる。このように、同時に両作品の勘物が異なる間違ひを起こしている箇所も見られるのである。

ほかには、源師賢の、

金葉… 藏人頭左中弁／正四位下参議／従二位資通／卿男母備後／守師長女

後拾遺… 参議資通男、母下野守政隆。母伊予守頼光女、左中弁正四位下。

のように、両作品の勘物が一致しない場合もいくつか見られる。<sup>12</sup>

両作品の勘物の情報が一致したとしても、和泉式部の、

金葉… 上東門院女房／越前守正四位下／大江雅致女或／説中納言懐平／女云々母越中／守正四位下平／保衡

女太皇／太后宫昌子内／親王乳母 和／泉守橘道貞／為妻仍号和泉」式部童名御／許丸

後拾遺： 越前守正四位下大江致雅女、母越中守保衡女。和泉守通貞為妻、仍和泉。童名御許丸。或権中納言懷平女。

のように、情報量・書き方の相違が散見される。情報が一致しないものは、堀河右大臣・津守國基・通俊・伊賀少将・基長・源道濟・江侍従・藤原隆家の勅物である。この場合、誤写や誤解が原因と思われる場合が多い。一方、両作品勅物の情報は食い違っていないが、書き方などに大きな相違がみられるものは、藤原範永・神主成助・六条右大臣北方・経信・公實・藤原節信・藤原公任・橘元任・大蔵卿匡房・藤原賢子・土御門右大臣・藤原伊家・律師慶範・藤原兼房・宇治前太政大臣・大江公資・資通・藤原家経・源頼家朝臣・中納言女王・長房・僧正深覺・藤原保昌・藤原惟規・康資王母・橘季通・周防内侍・上東門院・源信宗朝臣の勅物である。

藤原公任の勅物では、その父頼忠を、『清輔本金葉和歌集』では「廉義公男（頼忠）」とし、『後拾遺和歌抄』では「三条太政大臣」とするなど、高名な人物の呼称が異なっているものもあり、両作品の勅物の関係性は複雑なものであると思われる。

以上、國學院大學図書館蔵の『清輔本金葉和歌集』と『後拾遺和歌抄』との同一・相違する勅物をみてきた。『清輔本金葉和歌集』の祖本は、清輔周辺にあったと推測でき、二つの勅物が同一系統であることはおおむね認められるが、相違する点も多く見られ、一概に近似しているとも言い難い。全体的に『清輔本金葉和歌集』勅物のほうが情報量が多く、後世に書き加えられていった可能性があるのではないだろうか。

## 註

- (1) 『国學院大學図書館蔵武田祐吉博士旧蔵善本解題』(國學院大學武田祐吉博士旧蔵善本解題編集委員会編 角川書店 一九八五年 一七〇一八頁)。
- (2) 注2に同。「清輔本」の名称が持つ意味についても触れられている。
- (3) 樋口芳麻呂氏「藤原為家」(第一二卷 吉川弘文館 一九九一年)。ほか、久保田淳氏「為家と光俊」(『国語と国文学』第三五巻五号 一九五八年五月)、佐藤恒雄氏「藤原為家年譜(晩年)」(『中世文学研究』第一三三号 一九八七年八月)などを参考にした。
- (4) 正宗敦夫氏『金葉和歌集講義』(自治日報社 一九六八年)に二度本第三類本として分類されている。
- (5) 「國學院大學図書館蔵伝楠木正虎筆『金葉和歌集』の解題と翻刻」(『國學院大學校史・学術資産研究』第三号 二〇一一年三月)。
- (6) 藤本一恵「他伝本との本文異同」『太山寺本後拾遺和歌集とその研究』桜楓社 一九七一年
- (7) 「[資料紹介] 國學院大學図書館蔵『清輔本金葉和歌集』の勘物―紹介と翻刻―」(『國學院雑誌』第八六巻一号 一九八五年一月)。
- (8) 「解説」(陽明叢書国書篇第二輯 後拾遺和歌集 思文閣出版 一九七七年)。
- (9) 「後拾遺集の勘物」(『後拾遺集前後』笠間書院 一九七六年)。
- (10) 『国史大辞典』も『尊卑文脉』と同じく「参議兼経の男」とする。
- (11) 『経衡集』に通宗の歌が入っているために、混同した可能性もある。
- (12) 『尊卑文脉』では、頼光女となっている。

## 【翻刻】

為家筆『清輔本金葉和歌集』上・下冊

重要文化財 貴1853(1854)

『清輔本金葉和歌集』上冊

- ・表紙裏に「上 すみつき／九十三まい」の貼紙あり
- ・遊紙、前後に各1丁

## 金葉和詞集卷第一

## 春部

堀河院御時百首和哥めしける

に立春のこゝろをつかまつりける  
修理大夫顕季

【脚】廿首／正三位兵衛佐／讃岐 尾張／丹波 播磨／伊与 美

作／修理大夫／大貳大宰等経／畢

うちなひきはるはきにけりやまかはの  
いはまのこほりけふやとくらむ(1)

春宮大夫公實 「へ1丁オ」

【脚】大納言正二位「實季男／中納言公成／孫母経平／卿女

はるたちてこそゑにきえぬしらゆきは

またきにさける花かとぞみる(2)

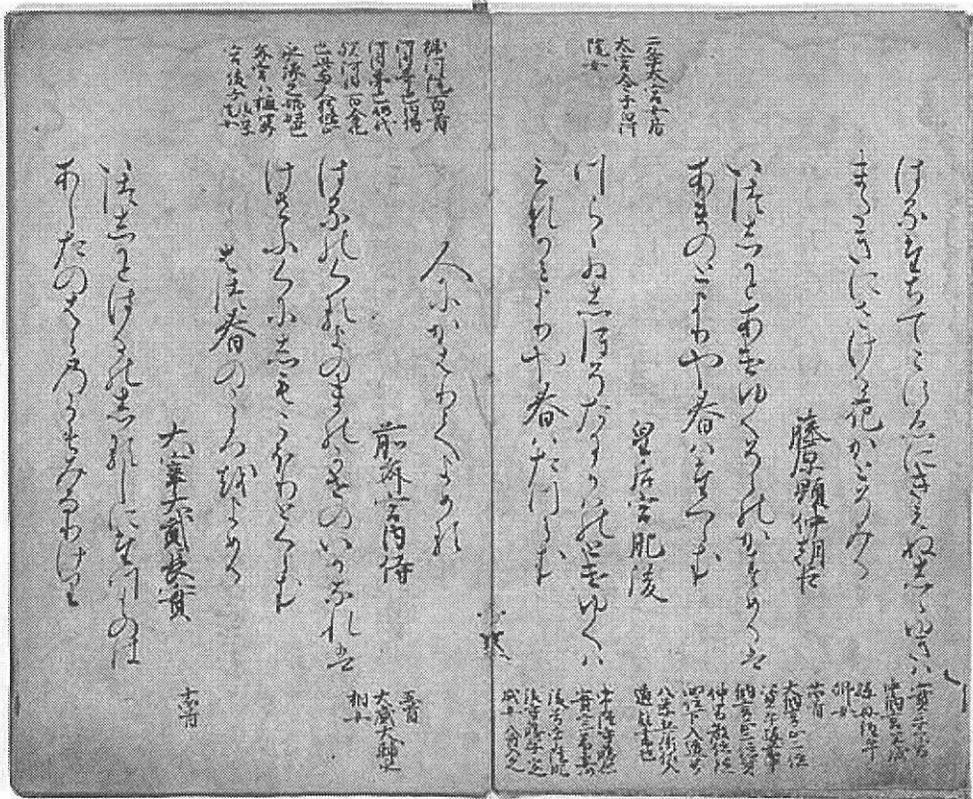
藤原顕仲朝臣

【脚】廿四首／大納言正二位／資平孫前中／納言正二位資／仲男

散位従／四位下入道号／八条兵衛佐入／道能書也

## 【凡例】

- ・漢字は通行のものを用いたが、旧字体や俗字に近い場合は、原本の表記にしたがった。
- ・へ～内は翻刻者注を示す。
- ・( ) 内の数字は歌番号を示す。
- ・丁数及び表裏は、「へ1丁オ」として丁の最後に示した。
- ・勘物のうち、頭注は【頭】、脚注は【脚】として、該当部分の後に示した。
- ・勘物部分の“ / ”は改行を示し、“ ”は改頁を示す。
- ・囲み線の文字は、虫喰いなどによる判読を示す。



いつしかとあけゆくそらのかすみめるは  
あまのとよりや春はたつらむ (3)

皇后宮肥後

【頭】二条大宮女房／太宮令子白河／院女

【脚】常陸守藤原／實宗為妻仍／後号常陸肥／後守藤原定／成女

八首入之

つらゝゐしほそたにかはのとけゆくは

みなかみよりや春はたつらむ (4)

〔一丁ウ〕

人にかはりてよめる

前斎宮内侍

【頭】堀河院百首／河内哥也内侍／河内弟也仍代／欽河内百合花

／也此兩人權僧正／永縁之姉妹也／斎宮ハ樋口斎／宮俊子

後三系  
院女

【脚】五首／大藏大輔永／相女

はるのくるよのまのかせのいかなれば

けさふくにしもこほりとくらむ (5)

はつ春のこゝろをよめる

大宰大貳長實

【脚】十四首

いつしかとはるのしるしにたつものは

あしたのはらのかすみなりけり (6)

〔二丁オ〕

むつきのついたちころゆきのふ  
り侍りけるをみてつかはしける

修理大夫顕季

あらたまのとしのはしめにふりしけは  
はつゆきとこそいふへかりけれ(7)

かへし 春宮大夫公實

あさとあけてはるのこすゑの雪みれは  
はつはなともやいふへかるらむ(8)

實行卿の家の哥合にかすみの  
心をよめる 少将公教母

【頭】少将字甚無／益後拾遺ニ／少将義孝ト／注ハ依有同名ノ也

【脚】二首ノ正三位修理大ノ夫顯季卿女ノ母經平女

あさみとりかすめるそらのけしきにや  
ときはのやまははるをしるらむ(9)

藤原顕輔朝臣

【脚】十四首

としことにかはらぬものは春かすみ  
たつたのやまのけしきなりけり(10)

霞のこゝろをよめる

「へ3丁オ」

あつさゆみはるのけしきになりにけり  
いるさのやまにかすみたなひく(11)  
百首哥のなかに鶯の心を讀る

【頭】堀河院百首ノ也

修理大夫顕季

うくひすのなくにつけてやまかねふく  
きひのやまひとはるをしるらむ(12)

はしめてうくひすをきくと

いえることをよめる

春宮大夫公實

けふよりやむめのたちえにうくひすの  
こゑさとなるゝはしめなるらむ(13)

正月八日春のたちけるに鶯の  
なきけるをきゝてよめる

藤原顕輔朝臣

けふやさはゆきうちとけてうくひすの

みやこにいつるはつねなるらむ(14)

暁聞鶯といえることをよめる

源雅兼朝臣

大宰大貳長實

【脚】五首ノ右大臣従一位ノ顯房男ノ母ノ惟綱女

「へ4丁オ」

「へ3丁ウ」

うくひすのこつたふさまもゆかしきに  
いまひとこゑはあけはてなけ (15)

皇后宮にて人々哥つかうま

【頭】 二条太宮

つりけるに雨重鶯といへる事

をよめる

源俊頼朝臣

「へ4丁ウ」

【脚】 卅一首／大納言経信男／母土左守貞／亮女

はるさめはふりしむれともうくひすの

こゑはしほれぬものにそありける (16)

良暹法師しのひてものへまか

りけるに左大弁経頼か家の

むめさかりにさきたりければ

門にひねもすにたちくらし

ゆふかたいひいれ侍りける

良暹法師

「へ5丁オ」

【脚】 四首 山法師／祇園別當 父／不詳 母實方／朝臣家女房

童名号白菊

むめのはなにほふあたりはよきてこそ

いそくみちをはゆくへかりけれ (17)

梅花夜薰といへることをよめる

前大宰大貳長房

【脚】 三首／前中納言隆家／孫前大納言正／二位経輔男／母資業

卿女／前参議前帥／不畢一任仍称／半大貳

むめかえにかせやふくらむ春のよは

おらぬそてさへにほひぬる哉 (18)

朱雀院に人々まかりて閑庭梅

【頭】 三条南 四条北／朱雀西 皇嘉／大路東也

花といへることをよめる

「へ5丁ウ」

大納言経信

【脚】 廿四首／中納言道方／男

けふこゝにみにこそさりせはむめのはな

ひとりや春のかせにちらまし (19)

道雅卿家哥合にむめのはなを

よめる

藤原兼房朝臣

【脚】 三首／栗田関白道／兼孫前中納言／正二位兼隆／男母参議

源／扶義女前讚／岐守正四位下／号栗田讚岐／守

ちりかゝるかけはみゆれとむめのはな

みつにはかこそうつらさりけれ (20)

梅花をよめる

「へ6丁オ」

源忠季

【脚】三首／従三位神祇／伯顯仲男

かきりありてちりは、つとも梅のはな  
かをはこすゑにのこせとそおもふ (21)

子日のこゝろをよめる

大中臣公長朝臣

【脚】五首／公政男 公政／号大田大夫

かすかのゝねのひのまつはひかてこそ  
神さひゆかむかけにかくれめ (22)

百首哥の中に子日のこゝろをよ

「〈6丁ウ〉

める

大蔵卿匡房

【頭】堀河院百首／哥也

【脚】七首／式部大輔拳／周孫成衡男／中納言

はるかすみたちかくせともひめこまつ  
ひくまのゝへにわれはきにけり (23)

柳糸随風

院御製

【脚】白河院後三条／院皇子母儀／贈大后茂子／大后 公成女

／御諱貞仁無／御法名并御／授戒十七歳／立太子廿歳／御

位廿四歳讓位／七十七崩

かせふけはやなきのいとのかたよりに  
なひくにつけてすくる春哉 (24)

百首哥のなかに柳をよめる

【頭】堀河院百首／哥也

春宮大夫公實

「〈7丁オ〉

あさまたきふきくるかせにまかすれは  
かたよりしけりあをやきのいと (25)

池岸柳をよめる

源雅兼朝臣

かせふけはなみのあやをるいけみつに  
いとひきそふるきしのあをやき (26)

よふことりをよめる

前斎宮尾張

「〈7丁ウ〉

【脚】二首／兼昌女也

いとかやまくるひとまなきゆふくれに  
こゝろほそくもよふことり哉 (27)

霞中帰鴈をよめる

藤原成通朝臣

【脚】五首

こゑせすはいかてしらまはるかすみ  
へたつるそらにかへるかりかね (28)

帰鴈をよめる

藤原経道

「〈8丁オ〉

【脚】一首／正二位中納言懷／平男母中納言／源保光女経／平父也

いまはとてこしちにかへるかりかねは  
はねもたゆくやゆきかゝるらむ (29)

花薫風

攝政左大臣

【頭】大織冠 鎌足／淡海公 不比等／房前 真楯／長岡大臣

内膳／閑院大臣 冬嗣／忠仁公 良房／昭宣公基経／貞信實長良子

公 忠平／九条殿 師輔「大入道殿 兼家／御堂 道長／

宇治殿 頼通／京極殿 師實／後二条殿 師通／富家殿

忠實／法性寺殿 忠通／

よしのやまみねのさくらやさきぬらむ

ふもとのさとにほふはるかせ (30)

【脚】十五首／法性寺殿

白河花見御幸

新院御製

【脚】一首／鳥羽院御諱／宗仁御寶名（ママ）／空覚一歳立／太

子五歳即位／廿一讓位五十四崩／實行尊僧正「作云々

たつねつるわれをや花もまちつらむ

「へ8丁ウ」

いまそさかりにほひましける (31)

太政大臣

【脚】一首／久我太政大臣／雅實右大臣／従一位頭房／男母隆俊卿／女

しらかはのなかれひさしきやとなれば  
はなのほひものどけかりけり (32)  
人にかはりてよめる

【頭】花見御幸事／大治（ママ）元年（甲辰）閏二月十四日

十三／日延引密風聞／件日院御隨／身装束尋「常而攝政隨

／身着飾法／皇令驚給／仍此日延引／次曰着錦攝／政隨身

成憚／改尋常裝／束云件和哥／序内大臣權／帥雅兼

大宰大貳長實

【脚】右衛門督通／季代也

ふくかせもはなのあたりはこゝろせよ

けふをはつねのはるとやはみる (33)

「へ9丁オ」

待賢門院兵衛

【脚】待賢門院御／名璋子／神祇伯頭仲／卿女 一首

よろつよのためしとみゆるはなのいろを

うつしとゝめよしらかはのみつ (34)

源雅兼朝臣

としことにさきそふやとのさくらはな

なをゆくすゑのはるそゆかしき (35)

宇治前太政大臣の京極家御幸

## 院御製

「〈9丁ウ〉

【頭】土御門南近衛／北富小路東／京極西二町也

はるかすみたちかへるへきそらそなき  
はなのほひにこゝろとまりて (36)

遠山桜といへることをよめる

春宮大夫公實

しらくもとをちのたかねのみえつるは  
みねつゝきさくさくらなりけり (37)

松間櫻花といへることを

内大臣

「〈10丁オ〉

【脚】九首／花蘭大臣後三／条院孫三宮／男 母中宮大夫／師忠

女

はることにまつのみとりにうつもれて  
かせにしられぬはなさくらかな (38)

左兵衛督實能

【脚】八首／正二位大納言公／實男 母但馬／守隆方朝臣女

このはるはのとかにゝほへさくらはな  
えたさしかはす松のしるしに (39)

新院御方にて花契遐年と

いへることをよめる

## 待賢門院中納言

「〈10丁ウ〉

【脚】一首／右京大夫藤／原定實女

しらくもにまかふさくらのこすゑにて  
ちとせのはるをそらにしるかな (40)

藤原顕輔朝臣

よろつよにみるへきはなのいろなれと

けふのほひをいつかわすれむ (41)

終日尋花といへることをよめる

源貞高朝臣

【脚】土左守従四位／俊頼二外祖父／播磨守国／盛男

しらくもにまかふさくらをたつぬとて

「〈11丁オ〉

かゝらぬやまのなかりける哉 (42)

堀河院御時女房たちを花山の

はなみせにつかはしたりけるか

かへりまいりて御前にて哥つ

かうまつりけるに女房にかはり

てよませたまひける

堀河院御製

【脚】四首／諱善仁 八歳／即位廿九崩

よそにてはいはこすたきとみゆる哉

「〈11丁ウ〉

みねのさくらやさかりなるらむ(43)

源師俊朝臣

【脚】七首／左大臣従一位／俊房男

ふけくれぬあすもきてみむさくらはな

こゝろしてふけはるのやまかせ(44)

【頭】兼盛哥云／ケフクレヌア／スモキテミム／サクラハナハナ

／チルハカリフクナ／ハルカセ

翫山花といへることをよめる

大宰大貳長實

かゝみやまうつろふはなをみてしより

おもかけにのみたゝぬひそなき(45)

深山花 攝政左大臣

みねつゝきにほふさくらをしるへにて

しらぬやまちにかゝりぬる哉(46)

人々にさくらのうた十首よませ

侍りけるによめる

修理大夫顯季

さくらはなさきぬるときはよしのやま

たちものほらぬみねのしらくも(47)

「(12丁ウ)

宇治前太政大臣家哥合にさく

らをよめる

【頭】高陽院哥合

皇后宮攝津

【脚】四首

ちりつもるにはをそみましさくらはな

かせよりさきにたつねさりせは(48)

源俊頼朝臣

【頭】同前

やまさくらさきそめしよりひさかたの

くもるにみゆるたきのしらいと(49)

「(13丁オ)

花為春友 内大臣

ちらぬまははなをともにてすきぬへし

はるよりのちのしるひとも哉(50)

山花留人といへることをよめる

大中臣公長朝臣

をのゝえはこのもとにてやくちなまし

春をかきらぬさくらなりせは(51)

遙見山花といへることをよめる

「(13丁ウ)

大藏卿匡房

はつせやまくもるにはなのさきぬれは

あまのかはなみたつかとそみる (52)

藤原忠隆

【脚】四首／改号資基／能登大夫是／也

よしのやまみねになみよるしらくもと

みゆるははなのこすゑなりけり (53)

堀河院御時女御殿女房たちくし

て花みありきけるによめる

「(14丁オ)

【頭】贈皇太后宮鳥／羽院母儀按察／大納言實季女／御名苡子匡

房」撰進云々／母儀経平女苡／子孫繁昌草／也仍件字ヲ／

撰進云々皇子／誕生後第九／箇日薨

前斎宮筑前乳母

はることにあかぬにほひをさくらはな

いかなるかせかおしまさるらむ (54)

人にかはりてよめる

僧正行尊

【脚】十首／平等院僧正／参議侍従々／二位源基平／男基平小一

／条院男

よそにてはおしみにきつるはな々れと

おらてはえこそかへるましけれ (55)

後冷泉院御時皇后宮哥合にさ

「(14丁ウ)

【頭】四条宮寛子宇治殿女

くらをよめる

堀河右大臣

【頭】詩哥管絃之／長也被懷妊／之時母夢有／人云所妊之児／ハ

菩提縷支／化身也法華／経一部持経／者也希代事

【脚】従一位右大臣頼／宗号入道右大／臣御堂入道／殿三男男母

成／明親王女／高松殿也

はるさめにぬれてたつねむやまさくら

くものかへしのあらしもそふく (56)

月前見花といへることをよめる

大藏卿匡房

月かけにはれみるよはのうきくもは

かせのつらさにおとらさりけり (57)

「(15丁オ)

顕季卿家にて桜哥十首人々

によませ侍りけるによめる

大宰大貳長實

はるの日の々とけきそらにふるゆきは

かせにみたる々はなにさりける (58)

水上落花といへることをよめる

源雅兼朝臣

はなさそふあらしやみねをわたるらむ

「(15丁ウ)

さくらなみよるたにかはのみつ (59)

落花満庭といへることをよめる

左兵衛督實能

けさみれはよはのあらしにちりはて、

にはこそはなのさかりなりけれ (60)

堀河院御時中宮御方にて風静

【頭】後三条院小女／中宮篤(トク)子

花香といへるをつかまつれる

源俊頼朝臣

「(16丁オ)

こす糸にはふくともみえてさくらはな  
かほるそかせのしるしなりける (61)

落花の心をよめる

長實卿母

春ことにおなしさくらははななれは

おしむこゝろもかはらさりけり (62)

落花随風といへることをよめる

右兵衛督伊通

「(16丁ウ)

【脚】四首／大宮右大臣俊／家孫正二位 大納言宗通／男母修理

大／夫頭季女

うらやましいかにふけはかはるかぜの

はなをこゝろにまかせそめけむ (63)

水上落花といへることをよめる

大納言経信

みなかみにはなやちるらむやまかはの

るくひにいとゝかゝるしらなみ (64)

藤原成通朝臣

【脚】父祖同伊通

みつのおもにちりつむ花をみる時そ

「(17丁オ)

はしめてかせはうれしかりける (65)

落花散衣といへることをよめる

藤原永實

【脚】四首／従五位上信乃／守相模守清／家男母駿河／守橘季通

女／範永孫也

ちりかゝるけしきはゆきのこゝちして

はなにはそてのぬれぬなりけり (66)

堀河院御ときはなのちりたるを

かきあつめておほきなるものゝ

ふたにやまのかたにつませ給て

「(17丁ウ)

中宮の御方にたてまつらせたま

ひたりけるを宮御覽して哥

よめとおほせ事ありければ  
つかうまつれる

みくしけ殿

さくらはなくもかゝるまでかきつめて

よしのゝやまとけふはみる哉(67)

はなのにはにちりつもりたる

「(18丁オ)

をみてよめる

郁芳門院安藝

にはのはなもとのこすゑにふきかへせ

ちらすのみやはこゝろなるへき(68)

夜思落花といへることをよめる

隆源法師

ころもてにひるはちりつるさくらはな

よるはこゝろにかゝるなりけり(69)

「(18丁ウ)

春ものへまかりけるに山田つくり

けるをみてよめる

高階経成朝臣

【脚】一首／従四位下常陸／守正四位下美濃守業政男／母兼隆

女陽明／門院御乳母

さくらさくやまたをつくるしつのは

かへすくやはなをみるらむ(70)

後冷泉院御時月のあかゝりける

夜女房たちをくして南殿にわた

たせたまひたりけるに庭の

「(19丁オ)

はなかつちりておもしろかりける

をこれをみしりたらむ人

にみせはやとおほせ事ありて

中宮の御方に下野あらむとてめ

【頭】四條宮寛子  
宇治殿女

しにつかはしたりければまいり

たるを御覽してあのはなお

りてまいれとおほせ事ありけ

れはおりてまいりたるをたゝに

「(19丁ウ)

てはいかゝとおほせことあるを

きゝてつかまつれる

下野

なかきよの月のひかりのなかりせは

くもるのはなをいかておらまし(71)

新院御方にて残花薫風といへる

【頭】鳥羽院也

ことをよめる

中納言雅定

「〈20丁オ〉

【脚】七首／太政大臣雅実／男 母

ちりはてぬはなのありかをしらすれば  
いとひしかせそけふはうれしき (72)

ならに人々百首よみけるにさ  
わらひをよめる

権僧正永縁

【脚】十一首／花林院僧正大／藏大甫永相／男永相式部／丞仍俗

号式／部僧正云々

やまさとはのへのさわらひもえいつる

おりにのみこそひとはみえけれ (73)

百首哥の中に杜若をよめる

【頭】堀河院百首也

「〈20丁ウ〉

修理大夫顕季

あつまちのかをやるぬまのかきつはた  
はるをこめてもさきにける哉 (74)

春田をよめる

大納言経信

あらをたにほそたにかはをまかすれば

ひくしめなはにもりつゝそゆく (75)

なはしろをよめる

「〈21丁オ〉

津守國基

【脚】三首／住吉神主従五／位下散位従五／位下基辰男／母神主

頼信女

しきのゐるのさはのをたをうちかへし  
たねまきてけりしめはえてみゆ (76)

【頭】作者ハマスケ／オフルトヨメ／リ云々

後冷泉院御時弘徽殿女御哥合に

なはしろの心をよめる

藤原隆資

【脚】二首／武藏守従五位／下越前守従四／位下／散位従五位上

頼正／男 母民部／卿家女／房号出雲守／相如女

やまさとのそとものをたのなはしろに

いはまのみつを<sup>せ</sup>かぬひそなき (77)

「〈21丁ウ〉

いゑのやまふきを人々あまたま

うてきてあそひけるついでに

おりけるを見てよめる

中納言まさたゝ

わかやとにまたこむ人もみるはかり

おりなやつしそやまふきのはな(78)

水邊款冬 攝政左大臣

かきりありてちるたにおしきやまふきを

「(22丁オ)

いたくなおりそゐてのかはなみ(79)

大宰大貳長實

春ふかみ神なひかはにかけみえて

うつろひにけりやまふきのはな(80)

後冷泉院御時哥合に山吹の心を

よめる 前大宰大貳長房

やまふきにふきくるかせも心あらは

そへなからをはちらさゝらなむ(81)

「(22丁ウ)

晩見躑躅といへることをよめる

摂政家参河

【脚】一首／源仲正女

いりひさすゆふくれなるのいろはえて

やましたてらすいはつゝし哉(82)

院北面にて橋上藤花といへること

をよめる 大夫典侍

【脚】一首／神祇伯顯仲／卿女

いろかへぬまつによそへてあつまちの

ときはのはしにかゝるふちなみ(83)

藤花をよめる

藤原顯輔朝臣

むらさきのいろのゆかりにふちのはな

かゝれるまつもむつまじき哉(84)

房の藤花のさかりなるをみて

律師増覚

【脚】一首／法勝寺上座／前中納言経／季男

くる人もなきわかやとのふちのはな

たれをまつとてさきかゝるらむ(85)

「(23丁ウ)

紫藤蔵松といへることをよめる

良暹法師

まつかせのをとせさりせはふちなみを

なにゝかゝれるはなとしらまし(86)

二条関白家にて池邊藤花と

いへることをよめる

大納言経信

いけにひつまつのはひえにむらさきの

「(24丁オ)

なみをりかくるふちさきにけり(87)

百首哥のなかに藤花をよめる

【頭】堀河院百首也

修理大夫顕季

すみのえのまつにかゝれるふちのはな  
かせのたよりになみやおるらむ (88)

雨中藤花といへることをよめる

神祇伯顕仲

【脚】八首／従三位／右大臣従一位／顕房男  
ぬるゝさへうれしかりけりはるさめに

いろますふちのしつくとおもへは (89)

隣家藤花といへることをよめる

内大臣家越後

【脚】二首／刑部大輔源／定信為妻

あしかきのほかとはみれとふちのはな  
にほひはわれをへたてさりけり (90)

三月盡のこゝろをよめる

大僧都證観

【脚】一首／堀河左大臣／俊房男

はるのゆくみちにきむかへほとゝきす

かたらふこゑにたちやとまると (91)

中納言雅定

のこりなくゝれぬるはるをおしむとて

こゝろをさへもつくしつる哉 (92)

三月盡によする恋のこゝろを

内大臣

春はおしひとはこよひとたのむれば

おもひわつらふけふのくれ哉 (93)

重服に侍りけるとしの三月盡の

日ひとつのもとよりをとつれてはへり

ければつかはしける

藤原顕輔朝臣

おもひやれめくりあふへき春たにも

たちわかるゝはかなしきものを (94)

撰政左大臣の家にて人々三月盡

のこゝろをよみけるによめる

源俊頼朝臣

かへるはるうつきのいみにさしこめて

しはしみあれのほとまでもみん (95)

金葉和詞集卷第二

「〈24丁ウ〉

「〈25丁オ〉

「〈25丁ウ〉

「〈26丁オ〉

「〈26丁ウ〉

## 夏部

四月一日更衣のこゝろをよめる

源師賢朝臣

【脚】四首／藏人頭左中弁／正四位下参議／従二位資通／卿男母

備後／守師長女

我のみそいそきたゝれぬなつころも

ひとへにはるをおしむ身なれば (96)

二条関白家にて人々餘花の心

をよみけるによめる

「〈27丁オ〉

藤原盛房

【脚】一首前肥後守／従五位下 前／土左守従四位下／季随孫前

越／前守従四位下／定成男 母／信濃守拳／直女 北家也

なつやまのあをはましりのをそさくら

はつはなよりもめつらしき哉 (97)

應徳元年四月三条内裏にて

庭樹結葉といへることをよませ

給ける 院御製

をしなへてこそゑみとりになりぬれば

まつのちとせもわかれさりけり (98)

「〈27丁ウ〉

大納言経信

たまかしはにはもはひろになりにけり  
こやゆふしてゝ神まつるころ (99)

鳥羽殿にて人々哥つかまつりけ

るに卯花の心をよめる

春宮大夫公實

ゆきのいろをうはひてさけるうのはなに

をのゝさとひとふゆこもりすな (100)

「〈28丁オ〉

卯花連牆といへることをよめる

大蔵卿まさふさ

いつれをかわきておらましまさとの

かきねつゝきにさけるうのはな (101)

卯花をよめる

江侍従

【脚】一首／左大臣乳母堀河左大臣／大江匡衡朝臣女／母赤染衛門

ゆきとしもまかひもはてすうのはなは

くるれば月のかけかともみゆ (102)

「〈28丁ウ〉

摂政左大臣

うのはなのさかぬかきねはなけれども

なになかれたるたまかわのさと (103)

卯花誰牆といへることをよめる

## 中納言實行

【脚】五首／正二位大納言／公實男 母／美乃守基貞／女

神やまのふもとにさけるうのはなは  
たかしめゆひしかきねなるらむ (104)

卯花をよめる

「〈29丁オ〉

## 撰政左大臣

ほとゝきすすかたはみつにやとれども  
こゑはうつらぬものにそありける (108)

「〈30丁オ〉

## 源雅光

## 大納言経信

しつのめかあしひたくやもうのはなの  
さきしかゝれはやつれさりけり (105)

鳥羽殿の哥合にほとゝきすをよ

める

## 修理大夫顕季

みやまいてゝまたさとなれぬほとゝきす  
うはのそらなるねをやなくらむ (106)

尋郭公といへることをよめる

「〈29丁ウ〉

## 藤原節信

【脚】一首／河内守従五／位下寛仁元／年十二月叙／長久五年正

／月任権守号／賀古也帯／刀

けふもまたたつねくらしつほとゝきす  
いかてきくへきはつねなるらむ (107)

郭公の哥十首人々によませ侍

りけるに

【脚】八首／右大臣顕房／男治部大甫

ほとゝきすなきつとかたるひとつての  
ことのはさへそうれしかりける (109)

郭公をたつねけるひきかて

二日許ありてなきけるをきゝ

てよめる

## 橘成元

ほとゝきすをとほのやまのふもとまで

「〈30丁ウ〉

たつねしこゑをこよひきく哉 (110)

長實卿の家哥合に郭公の心を

よめる

## 左京大夫経忠

としことにきくとはすれとほとゝきす  
こゑはふりせぬものにそありける (111)

待郭公

## 内大臣

こひすてふなきなやたゝむほとゝきす  
まつにねぬよのかすしつもれば (112)

まつにねぬよのかすしつもれば (112)

「〈31丁オ〉

藤原顕輔朝臣

ほとゝきすこゝろもそらにあくかれて  
よかれかちなるみやまへのさと(113)

承暦二年内裏哥合にほとゝきす  
を人にかはりてよめる

藤原孝善

ほとゝきすあかてすきぬるこゑにより  
あとなきそらをなかめつる哉(114)

郭公をよめる

権僧正永縁

きくたひにめつらしければほとゝきす  
いつもはつねのこゝちこそすれ(115)

源俊頼朝臣

まぢかねてたつねさりせはほとゝきす  
たれとかやまのかひになかまし(116)

郭公驚夢といへることをよめる

中納言實行

おとろかすこゑなかりせはほとゝきす  
またうつゝにはきかすやあらまし(117)

待郭公といへることをよませた

まへる

院御製

ほとゝきすまつにかゝりてあかすかな  
ふちのかなとや人のみるらむ(118)

俊忠卿の家哥合に郭公を

よめる

二条関白家筑前

まつひとのやとをはしらてほとゝきす  
をちのやまへをなきてすくなり(119)

中納言女王

【脚】二首／小一条院女源／仲正母後二条／殿御乳母(ママ)

ほとゝきすほのめくこゑをいつかたと  
きゝまとはしつあけほのゝそら(120)

時鳥をよめる

前齋院六条

【脚】二首／神祇伯顕仲／卿女後号堀河

「(32丁オ)

やとちかくしはしかたらへほとゝきす  
まつよのかすのつもるしるしに(121)

中納言雅定

ほとゝきすまれになくよはやまひこの  
こたふるさへそうれしかりける(122)

宇治前太政大臣家哥合に郭公

「(33丁オ)

「(32丁ウ)

をよめる

康資王母

【脚】三首／大皇太后宮女／房号筑前筑／前守高階成／順女

母伊勢大「甫

「〈33丁ウ〉

わきもこにあふさかやまのほとゝぎす  
あくれはかへるそらになくなり (126)

「〈34丁ウ〉

やまちかくうらくくふねはほとゝぎす

なくわたりこそとまりなりけれ (123)

匡房卿美作守にてくたりける

ときみちにてほとゝぎすのなく

をきゝてよめる

中原高真

きゝもあへすききそわかるゝほとゝぎす

わかこゝろなるふなてならねは (124)

「〈34丁オ〉

ほとゝぎすくもちにまとふこゑすなり  
をやみたにせよさみたれのそら (128)

「〈35丁オ〉

月前郭公といへることをよめる

皇后宮式部

【脚】二首／号美世波也／云々

ほとゝぎすくものたえまにもるつきの

かけほのかにもなきわたる哉 (125)

暁聞郭公といへることをよめる

源定信

【脚】二首／院中将信宗／男従五位上／刑部大輔

五月五日さねよしの卿の許に  
くすたまつかはすとて

内大臣

あやめくさねたくもきみかとはぬ哉

けふはこゝろにかゝれとおもふに (129)

永承四年殿上の根合にあやめ

をよめる 大納言経信

よろつよにかはらぬものはさみたれの

「〈35丁ウ〉

しづくにぬるゝあやめなりけり (130)

郁芳門院根合によめる

藤原孝善

あやめ草ひくてもたゆくなかきねの  
いかてあさかのぬまにおふらむ (131)

承暦二年内裏哥合にあやめを

よめる

春宮大夫公實

たまえにやけふのあやめはひきつらむ  
みかけるやとのつまにみゆるは (132)

みやつかへしけるむすめのもとに

五月五日くすたまつかはすとて

よめる

権僧正永縁母

あやめくさわか身のうきをひきかへて  
なへてならぬにおひもいてなむ (133)

百首のなかに菖蒲をよめる

春宮大夫公實

あやめ草よとのおふるものなれば  
ねなからひとはひくにやあるらむ (134)

五月五日いへにあやめふくをみ

てよめる

右近府生秦兼久

【脚】一首／兼方男

おなしくはとゝのへてふけあやめくさ  
さみたれたらほもりもこそすれ (135)

「(37丁オ)

むかしなかの院にすませ給ける

【頭】中院八六条／北室町東一／町也

ほとはみえさりけるあやめをひ  
とのなかの院のなと申けるをみ  
てよませたまひける

三宮

【脚】八首／輔仁後二条／院皇子也母／参議従二位／侍従基平女

あさましやみしふるさとのあやめ草

我しらぬまにおひにける哉 (136)

さみたれをよめる

「(37丁ウ)

参議師頼

【脚】六首／左大臣従一位／俊房男 母／實基女

さみたれにぬまのいはかきみつこえて  
まこもかるへきかたもしられす (137)

藤原定通

【脚】一首／道俊卿養子／實ハ中納言／保實男也／保實ハ大納言

／實季男也

さみたれはひかすへにけりあつまやの  
かやかのきはのしたくつるまで (138)

永曆二年内裏哥合にさみたれ  
のこゝろをよめる

源道時朝臣

【脚】一首／経信卿一男／大皇太后宮／亮

さみたれにたまえのみつやまさるらむ  
あしのしたはのかくれゆく哉 (139)

俊忠卿家哥合に五月雨の心を

よめる 藤原顕仲朝臣

さみたれにみつまさるらしさはたかは  
まきのつきはしうきぬはかりに (140)

さみたれの心をよめる

左兵衛督實能

さみたれはをたのみなくちてもかけて  
みつのこゝろにまかせてそみる (141)

三宮

さみたれはにいりえのはしのうきぬれは  
おろすいかたのこゝちこそすれ (142)

攝政左大臣の家にて夏月の心を  
よめる 神祇伯顯仲

「〈39丁オ〉

なつのよのにはにふりしくしらゆきは

月のいるこそきゆるなりけれ (143)

俊忠卿家哥合くひなの心を

よめる

藤原顕綱朝臣

【脚】一首／前讃岐守正四／位下参議正／二位兼隆卿／二男母弁

乳母

さとことにたゝくゝひなのをとすなり

こゝろのとまるやとやなからむ (144)

攝政左大臣家にてくひなの心

「〈39丁ウ〉

「〈38丁ウ〉

をよめる

源雅光

よもすからはかなくたゝくゝひなかな

させるともなきしはのかりやを (145)

實行卿家哥合夏月をよめる

修理大夫顯季

なつころもすそのゝくさをふくかせに

おもひもあへすしかやなくらむ (146)

水風曉涼といへることをよめる

「〈40丁オ〉

源俊頼朝臣

かせふけははすのうきはにたまこえて  
すゝしくなりぬひくらしのこゑ (147)

ともしの心をよめる

源仲正

【脚】二首／参河守頼綱／男

さはみつにほくしのかけのうつれるを  
ふたともしとやしかはみるらむ (148)

神祇伯頭仲

「〈40丁ウ〉

しかたゝぬはやまかすそにともしゝて  
いくよかひなきよをあかすらむ (149)

家の哥合に花橘をよめる

中納言俊忠

【脚】三首／正三位大納言／民部卿長家／孫正二位大納言／忠家

男／母大納言経輔／卿女

さつきやみはなたちはなのありかをは  
かせのつてにそゝらにしりける (150)

百首哥のなかに花橘をよめる

春宮大夫公實

「〈41丁オ〉

やとことにはなたちはなそにほふなる

ひときかすゑをかせはふけとも (151)

二条関白家にて雨後野草とい  
へることをよめる

源俊頼朝臣

このさともゆふたちしけりあさちふに  
つゆのすからぬくさのはもなし (152)

實行卿家哥合にうかはの心を

「〈41丁ウ〉

よめる

中納言雅定

おほるかはいくせうふねのすきぬらむ  
ほのかになりぬかゝりひのかせ (153)

夏夜月をよめる

【頭】三井寺経蔵／哥合 題月／慶禅蓮宗房也／タマクシケフ／タカミ

ヤマノ月／カケノアクルホトマテナカメツ／ルカナ／何前

読哉／不審々々

源親房

【脚】二首／淡路守仲房／男母常陸守／實宗女／頭仲卿孫遠／江  
權守

たまくしけふたかみやまのくもまより

いつれはあくるなつのよの月 (154)

六月はつかころに秋節になる

「〈42丁オ〉

ひ人のかりつかはしける

攝政左大臣

金葉和調集卷第三

秋部

みな月のてるひのかけはさしなから

かせのみ秋のけしきなる哉(155)

公實卿家にて對水待月と

いへることをよめる

藤原基俊

【脚】三首／右大臣從二位／俊家男 母／下總守順業／女從五位

上前／左衛門佐

なつのよの月まつほとのですさみに

いはもるしみついくむすひしつ(156)

秋隔一日といへることをよめる

【頭】土左守頼仲／哥也於長岡／詠之

中納言顕隆

【脚】三首／正四位下但馬／守隆方孫／參議正三位／大藏卿為房

／男母美乃守／頼国女

みそきするみきはにかせのすゝしきは

ひとよをこめて秋やたつらむ(157)

白紙

〔43丁オ〕

〔43丁ウ〕

百首哥のなかに立秋のこゝろを

よめる

とことにはふくゆふくれのかせなれと

秋たつひこそすゝしかりけれ(158)

野草帶露といへることをよめる

大宰大貳長實

〔44丁オ〕

まくつはふあたのおほのゝしらつゆを

ふきなはらひそ秋のはつかせ(159)

後冷泉院御時皇后宮哥合に

七夕のこゝろをよめる

土左内侍

よろつよにきみそみるへきたなはたの

ゆきあひのそらをくものうへにて(160)

七夕の心をよめる

〔44丁ウ〕

能因法師

たなはたのこけのころもをいとほすは

ひとなみく／＼にかしもしてまし(161)

七月七日ちゝのふくにて侍りける

としよめる

橘元任

【脚】二首／文章生散位／従五位下長門／守従五位上／元愷孫无

官／永愷男本體ハ

ふちころもいみもやするとたなはたに

かさぬにつけてぬるゝそて哉 (162)

「〈45丁オ〉

七夕の心をよめる

前斎宮河内

【脚】一首／河内永縁僧／正妹也若内／侍代河内号／百合花讀／

歌可尋

こひく／てこよひはかりやたなはたの

まくらにちりのつもらさるらむ (163)

三宮

あまのかはわかれにむねのこかるれば

かへさのふねはかちもとられす (164)

中納言國信

「〈45丁ウ〉

【頭】堀河院百首／哥也

【脚】右大臣顕房／男 母良任女

たなはたにかせるころものつゆけさに

あかぬけしきをそらにしるかな (165)

七夕後朝のこゝろを

内大臣

かきりありてわかるゝときもたなはたの

なみたのいろはかはらさりけり (166)

皇后宮権大夫師時

【頭】堀河院百首

【脚】四首／左大臣従一位／俊房男 母／基平女

たなはたのあかぬわかれのなみたにや

「〈46丁オ〉

はなのかつらもつゆけかるらむ (167)

内大臣家越後

【脚】三首／従四位上前／越後守藤／原季綱女

あまのかはかへさのふねになみかけよ

のりわつらはゝほともふはかり (168)

かへるさはあさせもあらしあまのかは

あかぬなみたにみつしまさらは (169)

草花告秋といへることをよめる

源雅兼朝臣

「〈46丁ウ〉

さきそむるあしたのはらのをみなへし

秋をしらすなつまにさりける (170)

源縁法師

## 【脚】一首

さきにけりくちなしいろのをみなへし  
いはねとしるし秋のけしきは (171)

秋のはしめの心をよめる

大納言経信

をのつから秋はきにけりやまさとの

「〈47丁オ〉

くすはひかゝるまきのふせやに (172)

田家早秋といへることをよめる

右兵衛督伊通

いなはふくかせのをとせぬやとならば

なにゝつけてか秋をしらまし (173)

山家秋といへることをよめる

藤原行盛

【脚】正四位下式部／権大輔家経／孫正四位下式／部大甫正家／

男母大学頭「實範女正五／位下左衛門／権佐兼文章／博士

越中介

やまふかみとふひともなきやとなれと

「〈47丁ウ〉

そとものをたに秋はきにけり (174)

師賢朝臣のむめつのやまさとに

人々まかりて田家秋風といへること

をよめる

大納言経信

ゆふされはかとのいなはをとつれて  
あしのまるやに秋風そふく (175)

みか月のこゝろをよめる

大江公資朝臣

「〈48丁オ〉

【脚】一首榮外記／兵部権大輔／従四位下前薩／摩守従四位下

清言男以言／養子

やまのはにあかていりぬるゆふつくよ

いつありあけにならむとすらむ (176)

攝政左大臣の家にてゆふつくよの

こゝろをよめる

藤原忠隆

かせふけはえたやすからぬこのまより

ほのめく秋のゆふつくよ哉 (177)

月旅宿友といへることをよめる

「〈48丁ウ〉

法橋忠命

草まくらこのたひねにそおもひしる

月よりほかにともなかりけり (178)

閑見月といへることをよめる

顯仲卿女

【脚】三首／散位源重道／妻也俗号伊／賀大夫云々後／任兵部少

甫／改号信濃

もろともにくさはのつゆのおきゐすは

ひとりやみまし秋のよの月 (179)

翫明月といへることをよめる

「〈49丁オ〉

前中納言伊房

【脚】一首／権大納言正二／位行成孫／参議従二位／兵部卿行経

／男 母前土左／守源貞亮女

いつはりになりそしぬへきつきかけを

このみるはかりひとにかたらは (180)

鳥羽殿にて旅宿月といへることを

よめる 春宮大夫公實

われこそはあかしのせとにたひねせめ

おなしみつにもやとる月哉 (181)

寛治八年八月十五夜鳥羽殿に

「〈49丁ウ〉

て翫池上月といへることをよませ

たまへる

院御製

いけみつにこよひの月をうつしもて

こゝろのまゝにわかものとみる (182)

大納言経信

てるつきのいはまのみつにやとらすは

たまるるかすをいかてしらまし (183)

「〈50丁オ〉

月をなかめてよめる

民部卿忠教

【脚】一首／京極大殿男／母参議散位／永業女大殿／乳母

いつくにもこよひの月をみるひとの

こゝろやおなしそらにすむらむ (184)

後冷泉院御時皇后宮哥合に

こまむかへをよめる

藤原隆経朝臣

ひくこまのかすよりほかにみえつるは

「〈50丁ウ〉

せきのしみつのかけにさりける (185)

こまむかへの心をよめる

源仲正

あつまちをはるかにいつるもち月の

こまにこよひやあふさかのせき (186)

八月十五夜のこゝろをよめる

源親房

さやけさはおもひなしかと月かけを

「〈51丁オ〉

こよひとしらぬひとにとは、や (187)

閏九月あるとしの八月十五夜に

よめる 春宮大夫公實

あきはるをのこりおほかるとしなれと

こよひの月のなこそおしけれ (188)

水上月をよめる

前齋院六条

くものなみかゝらぬさよのつきかけを

きよたきかはにうつしてそみる (189)

九月十三夜閑見月といへることを

よめる 源俊頼朝臣

すみのほるこゝろやそらをはらふらむ

くものちりるぬあきのよの月 (190)

皇后宮肥後

月をみておもふこゝろのまゝならば

ゆくゑもしらすあくかれなまし (191)

「〈52丁オ〉

人のもとにまかりてもの申ける程

に月のいりければよめる

源師俊朝臣

いかにしてしからみかけむあまのかは

なかるゝ月やしはしよとむと (192)

経長卿のかつらのやまさとにて

閑見月といへることをよめる

大納言経信

「〈52丁ウ〉

こよひわかゝつらのさとのつきをみて

おもひのこせることのなき哉 (193)

承暦二年内裏哥合に月をよ

める 春宮大夫公實

くもりなきかけをとゝめはやまのはに

いるとも月をおしまさらまし (194)

宇治前太政大臣家哥合に月をよ

める 皇后宮攝津

「〈53丁オ〉

てるつきのひかりさえゆくやとなれは

秋のみつにもつらゝるにけり (195)

源俊頼朝臣

やまのはにくものころもをぬきすてゝ

ひとりも月のたちのほる哉 (196)

【頭】高陽院哥合也／時難云秋裸形可／見苦

水上月 攝政左大臣

あしねはひかつみもしけきぬま水に

わりなくやとるよはの月哉 (197)

「〈53丁ウ〉

源行宗朝臣

「〈54丁ウ〉

宇治前太政大臣家の哥合に月の

【頭】一品宮号高／蔵一宮／後朱雀院／長女御名祐／子

こゝろをよめる

一宮紀伊

【脚】三首／祐子内親王／女房散位従／五位下平経方／女母小弁

為紀／伊守重経妻／仍号紀伊

かゝみやまみねよりいつるつきなれば

くもるよもなくかけをこそみれ (198)

秋なにはのかたにまかりて月の

あかゝりけるよゝめる

【頭】高津攝州也／難波京也

参議師頼

「〈54丁オ〉

【頭】赤染哥也

讀人不知

【脚】一首／蔵人式日丞／従五位下野／守  
みかさやまひかりをさしていてしより  
くもらてあけぬ秋のよの月 (202)

「〈55丁オ〉

宇治入道前太政大臣の卅講哥合

に月のこゝろを

いにしへのなにはのこともおもひいてゝ

たかつのみやに月のすむらむ (199)

秋月如晝といへることをよめる

藤原隆経朝臣

きくのうへにつゆなかりせはいかにして

こよひの月をよるとしらまし (200)

翫明月といへることをよめる

【脚】六首／参議従二位／侍従基平男／小一条院孫

源行宗朝臣

「〈54丁ウ〉

なこりなくよはのあらしにくもはれて

こゝろのまゝにすめる月かな (201)

八月十五夜に人々哥よみけるに

よめる

平師季

【脚】一首／蔵人式日丞／従五位下野／守

みかさやまひかりをさしていてしより

くもらてあけぬ秋のよの月 (202)

宇治入道前太政大臣の卅講哥合

に月のこゝろを

「〈55丁オ〉

やとからそつきのひかりもまさりける

よのくもりなくすめはなりけり (203)

月をよめる

藤原忠隆

なかむれはふけゆくまゝに雲はれて

そらものとかにすめる月かな (204)

奈良の花林院の哥合に月を讀る

「〈55丁ウ〉

## 権僧正永縁

いかなれは秋はひかりのまさるらむ  
おなしみかさのやまのはの月(205)

月哥とてよめる

## 藤原顕輔朝臣

みかさやまもりくる月のきよければ  
神のこゝろもすみやしぬらむ(206)

太皇太后宮扇合に月の心をよめる

## 大納言経信

みかさやまみねよりいつるつきかけは  
さほのかはせのこほりなりけり(207)

顕季卿の家にて九月十三夜人々

月哥よみけるによめる

## 大宰大貳長實

くまもなきかゝみとみゆるつきかけに  
こゝろうつらぬひとはあらしな(208)

## 源俊頼朝臣

むらくもや月のくまをはのこふらむ  
はれゆくたひにてりまさる哉(209)

## 藤原家綱(ママ)

いまよりはこゝろゆるさし月かけに  
ゆくゑもしらす人さそひけり(210)

月照古橋といへることをよませ

たまへる

三宮

「(57丁オ)

とたえしてひとまかよはぬたな橋は  
月はかりこそすみわたりけれ(211)

水上月をよめる

## 藤原實光朝臣

【脚】二首／正四位下式部／大甫實綱孫／従四位下右中／弁有信

男／母實政卿女

つきかけのさすにまかせてゆくふねは

あかしのうらやとまりなるらむ(212)

題不知

大宰大貳長實

さらぬたにたまにまかひてをくつゆを

「(57丁ウ)

いとゝみかける秋のよの月(213)

永承四年殿上哥合に月の心を

よめる

藤原家経朝臣

よとゝもにくもらぬくものうへなれは

おもふことなく月をみる哉(214)

月前旅宿のこゝろをよめる

## 修理大夫顕季

まつかねにころもかたしきよもすから

「〈58丁オ〉

なかむる月をいもみるらむか (215)

ひとり月をなかめてよめる

## 藤原有教母

【脚】改云良教云々／中務少甫件／母賀茂神主／成継女

なかむれはおほえぬこともなかりけり

月やむかしのかたみなるらむ (216)

行路暁月といへることをよめる

## 権僧正永縁

もろともにつとはなしにありあけの

「〈58丁ウ〉

月のみをくるやまちをそゆく (217)

對山待月といへることをよめる

## 土御門右大臣

【脚】一首／中務卿具平／親王男／母為平女／右大臣従一位／師

房也

ありあけの月まつほとこのうたゝねは

やまのはのみそゆめにみえける (218)

山家暁月をよめる

## 中納言顕隆

やまさとのかとたのいねのほのくくと

「〈59丁オ〉

あくるもしらす月をみる哉 (219)

月あかゝりけるころあかしに

まかりてつきみてのほりたりける

にみやこのひとく月はいかゝなど

たつねけるをきゝてよめる

## 平忠盛朝臣

【脚】四首／讃岐守正盛／朝臣男／正衡孫

ありあけの月もあかしのうら風に

なみはかりこそよるとみえしか (220)

「〈59丁ウ〉

月前落葉といへることをよめる

## 源俊頼朝臣

あらしをやはもりの神もたゝるらむ

月にもみちのたむけしつれば (221)

虫をよめる

## 前斎院六条

つゆしけきのへにならひてきりくす

わかたまぐらのしたになくなり (222)

「〈60丁オ〉

はたをりといふむしをよめる

顯仲卿女

さゝかにのいとひきかくるくさむらに  
はたをるむしのこゑきこゆなり (223)

題讀人不知

たまつさはかけてきくれとかりかねの  
うはのそらにもきこゆなる哉 (224)

春宮大夫公實

いもせやまみねのあらしやさむからむ  
ころもかりかねそらになくなり (225)  
しかをよめる

三宮大進

つまこふるしかそなくなるひとりねの  
とこのやまかせみにやしむらむ (226)  
暁聞鹿といへることをよめる

皇后宮右衛門佐

おもふことありあけかたの月かけに  
あはれをそふるさをしかのこゑ (227)  
夜聞鹿といへることをよめる

内大臣家越後

よそになくこゑにこゝろそあくかるゝ

我身はしかのつまならねとも (228)

攝政左大臣家にて旅宿鹿といへ  
ることをよめる

源雅光

さもこそはみやこひしきたひならめ  
しかのねにさへぬるゝそてかな (229)  
しかのうたとてよめる

藤原顯仲朝臣

よのなかをあきはてぬとやさをしかの  
いまはあらしのやまになくらむ (230)  
野花帶露といへることをよめる

皇后宮肥後

しらつゆとひとはいへとも野辺見れば  
をくはなことにいろそかはれる (231)

太皇太后宮の扇合に人にかはりて

【頭】 四条宮宇治殿ノ女

はきの心をよめる

僧正行尊

こはきはらにほふさかりはしらつゆも  
いろくゝにこそみえわたりけれ (232)

「〈61丁オ〉

「〈60丁ウ〉

「〈61丁ウ〉

「〈62丁オ〉

「〈62丁ウ〉

はきをよめる

大宰大貳長實

しらすけのまのゝはきはらつゆなから  
おりつるそてそひとなとかめそ (233)

【頭】シラスケノマノノ、ハキハラハノ有万葉集

女郎花をよめる

隆源法師

をみなへしさけるのへにそやとりぬる  
はなのなたてになりやしぬらむ (234)

顕隆卿家哥合に女郎花を讀る

中納言俊忠

ゆふつゆのたまかつらしてをみなへし  
のはらのかせにおれやふすらむ (235)

女郎花をよめる

藤原顕輔朝臣

しらつゆやこゝろをくらむをみなへし  
いろめくのへにひとかよふとて (236)

攝政左大臣

をみなへしよのまのかせにおれふして  
けさしもつゆにこゝろをかるな (237)

攝政左大臣家にてふちはかまを

よめる 源忠季

さほかはのみきはにさけるふちはかま  
なみのよりてやかけむとすらん (238)

蘭をよめる

右兵衛督伊通

かりにくるひともきよとやふちはかま  
あきのゝことにしかのたつらむ (239)

神祇伯顯仲

さゝかにのいとのとちめやあたらならむ  
ほころひわたるふちはかま哉 (240)

鳥羽殿前裁合に女郎花の心を

よめる 春宮大夫公實

あたしのゝつゆふきみたるあきかせに  
なひきもあへぬをみなへし哉 (241)

野草留人といへることをよめる

平忠盛朝臣

ゆくひとをまねくかのへのはなすゝき  
こよひもこゝにたひねせよとや (242)

堀河院御時御前にてをのゝ

「(63丁オ)

「(63丁ウ)

「(64丁オ)

「(64丁ウ)

探題して哥つかまつりける

「〈65丁オ〉

つゆもあたにはをかしとそおもふ (246)

「〈66丁オ〉

にすゝきをとりてつかうまつれる

源俊頼朝臣

うつらなくまのゝいり江のはまかせに

おはなゝみよる秋のゆふくれ (243)

河霧をよめる

藤原基光

【脚】三首／珍海父繪工也／内匠頭大和守／元成光也前／越前守

従五位／上頼成男前／石見守従五位／下頼方孫北／家也

うちかはのかはせもみえぬゆふきりに

まきのしまひとふねよはふなり (244)

「〈65丁ウ〉

はゝきゝのこすゑやいつこおほつかな

「〈66丁ウ〉

郁芳門院の根合に菊をよめる

【頭】鳥羽殿前裁／合哥也根合／二菊不可有欵

中納言通俊

【脚】三首／前大貳従三位経平男／母家業女

さかりなるまかきのきくをけさ見れば

またそらさへぬゆきそつもれる (245)

鳥羽殿前裁合にきくをよめる

修理大夫顕季

ちとせまできみかつむへきゝくなれば

「〈67丁オ〉

攝政右大臣家にて紅葉隔障と

いへることをよめる

藤原仲實朝臣

【脚】四首／正四位下中宮／亮越前守前／遠江守永信／孫従五位

上永／業男母大殿／北政所乳母南／家也

もすのゐるはしのたちえのうすもみち

たれわかそのゝものとみるらむ (247)

永承二年内裏の哥合に紅葉

をよめる 源師賢朝臣

みなそのはらはもみちしにけり (248)

宇治前太政大臣大井にまかりたり

けるともにまかりて水邊紅葉と

いへることをよめる

大納言経信

おほ井かはいはなみたかしいかたしよ

きしのもみちにあからめなせそ (249)

太皇太后宮扇合に人にかはりて

もみちの心をよめる

源俊頼朝臣

をとはやまもみちゝるらしあふさかの  
せきのをかはにゝしきをりかく(250)

落葉をよめる

藤原伊家

【脚】二首／右中弁正五位／下周防守内蔵／頭正四位下公基／男

母範永朝臣／女正四位下春／宮亮保家孫

たにかはにしからみかけよたつたひめ  
みねのもみちにあらしふくなり(251)

大井の御幸につかうまつれる

修理大夫顕季

おほるかはるせきのをとのなかりせは  
もみちをしけるわたりとやみむ(252)

深山紅葉といへることをよめる

大納言経信

やまもりよおのゝをとたかくひゝくなり  
みねのもみちはよきてきらせよ(253)

紅葉をよめる

神祇伯顕仲

よそにみるみねのもみちやちりくると  
ふもとのさとはあらしをそまつ(254)

大井の逍遙に水上落葉といへる  
ことをよめる

藤原伊家

はゝそちるいはまをかつくかもとりは

をのかあをはもゝみちしにけり(255)

落葉埋橋といへることをよめる

修理大夫顕季

をくらやまみねのああらしのふくからに  
たにのかけはしもみちしにけり(256)

落葉蔵水といへることをよめる

大中臣公長朝臣

おほ井かはちるもみちはにうつもれて

となせのたきはをとのみそする(257)

九月盡のこゝろをよめる

中原経則

あすよりはよものやまへの秋きりの  
おもかけにのみたゝむとすらん(258)

源師俊朝臣

「〈68丁オ〉

「〈67丁ウ〉

「〈69丁オ〉

「〈68丁ウ〉

【脚】或本俊頼ト／在然而不見／散木集若／僻事款

くさのにははかなくきゆるつゆをしも  
かたみにをきて秋のゆくらむ (259)

「〈69丁ウ〉

しくれつゝかつちるやまのもみちはを  
いかにふくよのあらしなるらむ (262)

奈良に人々百首哥よみけるに

時雨をよめる

権僧正永縁

「〈71丁ウ〉

九月盡日大井にまかりてよめる

春宮大夫公實

おしめともよものもみちはちりはてゝ  
となせそ秋のとまりなりける (260)

「〈70丁オ〉

やまかはのみつはまさらてしくれには  
もみちのいろそふかくなりける (263)

白紙

〈70丁ウ〉

時雨を讀る

攝政家参河

金葉和詞集卷第四

冬部

承暦元年御前にて殿上のをの

ことも探題てうたつかうまつり

けるに時雨をとりてつかまつれる

源師賢朝臣

神な月しくるゝまゝにくらふやま

したてるはかりもみちしにけり (261)

「〈71丁オ〉

【脚】二首／右大臣實資／孫大納言正二位／資平男

正二位「前帥

前／中納言

前中納言資仲

「〈72丁オ〉

紅葉といへることをよめる

【頭】諱敦成／一条院第三皇／子母儀上東門／院

後朱雀院御時御前にて霧籠

従二位藤原親子家の造昏合に

しくれをよめる

もみちゝるやまは秋きりはれせねは  
たつたのかはのなかれをそみる (265)

大井にまかりて落葉のこゝろを

よめる 平致親

【脚】一首／重之子坎／然者源也

おほ井かほもみちをわくるいかたしは

さほにゝしきをかけてこそみれ (266)

落葉をよめる

大納言経信

「(72丁ウ)

【頭】同院百首

「(73丁ウ)

百首哥のなかにもみちをよめる

【頭】堀河院百首也

源俊頼朝臣

たつたかはしからみかけて神なひの

みむろのやまのもみちをそみる (270)

あしろをよめる

皇后宮肥後

「(73丁ウ)

みむろやまもみちしるらしたひ人の  
すけのをかさになしきをりかく (267)  
竹風似雨といへることをよめる

中納言基長

【脚】二首／堀河右大臣頼宗孫 内大臣／正二位能長／男 母

源濟政／女

なよたけのをとにそゝてをかつきつる

ぬれぬにこそはかせとしりぬれ (268)

十月十日ころしかのなきけるを

きゝて読る

「(73丁オ)

法印光清

【脚】八幡 別當／法印頼清／弟子 同宮／別當

なにことにあきはてなからさをしかの

おもひかへしてつまをこふらむ (269)

百首哥のなかにもみちをよめる

【頭】堀河院百首也

源俊頼朝臣

たつたかはしからみかけて神なひの

みむろのやまのもみちをそみる (270)

あしろをよめる

皇后宮肥後

「(73丁ウ)

ひをのよるかはせにみゆるあしろきは  
たつしらなみのうつにやあるらむ (271)  
月照網代といへることをよめる

大納言経信

つきゝよみせゝのあしろによるひをは

たまもにさゆるこほりなりけり (272)

旅宿冬夜といへることをよめる

たひねするよとこさへつゝあけぬらし

とかたそかねのこゑきこゆなり (273)

関路千鳥といへることをよめる

源兼昌

【脚】二首 二条大宮也／皇后宮少進／従五位下攝／津守俊輔／

「(74丁オ)

「(74丁オ)

男

あはちしまかよふちとりのなくこゑに  
いくよめさめぬすまのせきもり (274)

こほりをよめる

藤原隆経朝臣

「(74丁ウ)

たかせふねさほのをとにそしられける  
あしまのこほりひとへしにけり (275)

【頭】後拾遺云／サムシロハムヘサ／エケラシカクレ／ヌノアシ

マノコ／ホリヒトヘシニケ／リ

谷水結氷といへることをよめる

内大臣

たにかはのよとみにむすふこほりこそ  
みるひともなきかゝみなりけれ (276)

百首哥のなかに氷をよめる

【頭】堀河院百首也

藤原仲實朝臣

「(75丁オ)

しなかとりるなのふしはらかせさえて  
こやのいけみつこほりしにけり (277)

冬月をよめる

神祇伯頭仲

冬さむみそらにこほれる月かけは  
やとにもるこそとくるなりけれ (278)

水満池上といへることをよめる

大納言経信

「(75丁ウ)

みつとりのつらゝのまくらひまもなし  
むへさえけらしとふのすかこも (279)

深山霰をよめる

大藏卿匡房

はしたかのしらふにいろやまかふらむ  
とかへるやまにあられふるなり (280)

水邊寒草といへることをよめる

大中臣公長朝臣

「(76丁オ)

たかねにはゆきふりぬらしましかは  
ほきのかけくさたるひすかれり (281)

宇治前太政大臣家哥合に雪の

こゝろをよめる

源頼綱朝臣

【脚】一首 藏人／前参河守従四／位下美乃守／正四位下頼国／

男母尾張守／中清女

ころもてによこのしら風さえく／て

こたかみやまはゆきふりにけり (282)

橋上初雪といへることを読る

「(76丁ウ)」

ことはりやかたのゝをのになくきゝす

さこそはかりのひとはつらけれ (287)

百首哥のなかに雪の心をよめる

【頭】堀河院百首也

大蔵卿匡房

大蔵卿匡房

しらなみのたちわたるかとみゆるかな  
はまなのはしにふれるはつゆき (283)

初雪をよめる

大納言経信

宇治前太政大臣家哥合に雪の

心を読る 皇后宮攝津

「(78丁オ)」

はつゆきはまきのはしろくふりにけり  
こやをのやまのふゆのさひしき (284)

雪中鷹狩をよめる

「(77丁オ)」

ふるゆきにすきのあをはもうつもれて  
しるしもみえすみわのやまもと (289)

中納言女王

源道濟

中納言女王

【脚】一文章生／藏人筑前守／正五位下 前／陸奥守従四／位

下信明孫／伊豆守従五／位下方国男

いはしろのむすへるまつにふるゆきは  
はるもとけすやあらむとすらむ (290)

大嘗會主基方備中国弥高山

をよめる

ぬれくもなをかりゆかむはしたかの  
うはゝのゆきをうちはらひつゝ (285)

たかゝりの心をよめる

【頭】讃岐院御時／四尺御屏風乙／帖三首内題晚／冬弥高山白雪

源俊頼朝臣

／立方積云々

藤原行盛

「(78丁ウ)」

はしたかをとりかふさはにかけみれば  
我身もともにとやかへりせり (286)

内大臣家越後

「(77丁ウ)」

ゆきふれはいやたかやまのこすゑには

また冬なからはなさきにけり (291)

雪の哥とてよめる

源俊頼朝臣

ころもてのさえゆくまゝにしもとゆふ

かつらきやまにゆきはふりつゝ (292)

雪行幸にをそくまいりければ

しきりにおそきよしの御つかひ

「(79丁オ)」

たまはりてつかまつれる

六条右大臣

あさことのかゝみのかけにおもなれて

ゆきみにとしもいそかれぬ哉 (293)

すみかまをよめる

【頭】堀河院百首也

皇后宮権大夫師時

すみかまにたつけふりさへおのやまは

ゆきけのくもとみゆるなりけり (294)

「(79丁ウ)」

百首哥のなかに雪をよめる

【頭】同院百首也

隆源法師

みやこたにゆきふりぬれはしからきの

まきのそまやまあとたえぬらむ (295)

皇后宮肥後

みちもなくつもれるゆきにあとたえて

ふるさといかにさひしかるらむ (296)

選子内親王いつきにおはしまし

【頭】大齋院

「(80丁オ)」

けるとき雪のふりたるに月の

あかゝりけるよまいりたりけれ

と女房たちねたりけるにやを

とせさりければみすにむすひ

つけ侍りけるうた

藤原兼房朝臣

かきくらしあめふるよはやいかならむ

月とゆきとはかひなかりけり (297)

「(80丁ウ)」

家経朝臣のかつらのやまさとに

障子のゑに神樂したるかたか

きたるところをよめる

康資王母

さかきはやたちまふそてのおひ風に

なひかぬ神はあらしとそ思 (298)

神樂のこゝろをよめる

皇后宮権大夫師時

「81丁オ

神かきのみむろのやまにしもふれは

ゆふしてかけぬさかきはそなき (299)

こほりをよませたまへる

三宮

つなかねとなかれもゆかすたかせふね

むすふこほりのとけぬかきりは (300)

水鳥をよめる

前齋院六条

「81丁ウ

なか／＼にしものうはきをかさねてや

をしのけころもさへまさるらむ (301)

池の氷を読む

前齋宮内侍

なみまくらいかにうきねをさたむらむ

こほりますたのいけのをしとり (302)

修理大夫顕季

【頭】堀河院百首／哥也

さむしろにおもひこそやれさゝのはに

「82丁オ

さゆるしもよのをしのひとりね (303)

依花待春

内大臣

なにとなくとしのくるゝはおしけれと

はなのゆかりにはるをまつかな (304)

歳暮の心をよめる

藤原成道朝臣

人しれすくれ行としをおしむまに

はるいとふなのたちぬへき哉 (305)

「82丁ウ

攝政左大臣家にて各題ともを探

てよみけるに歳暮をとりて

よめる

藤原永實

かそふるにのこりすくなき身にしあれば

せめてもおしきとしのくれ哉 (306)

この哥よみてのちとしのうち

身まかりにけりとそ

「83丁オ

歳暮のこゝろをよませたまひけ

る

三宮

いかにせむくれゆくとしをしるへにて

みをたつねつゝをいはきにけり (307)

中原長国

【脚】一首文章生／外記 肥後守／正五位下大隅／守従五位下／

酒人重頼男

としくれぬとはかりこそはきかましか

我みのうへにつもらさりせは (308)

「(83丁ウ)

中納言國信

【頭】堀河院百首也／件百首題除／夜云々

なにことをまつともなしにあけくれて

ことしもけふになりける哉 (309)

「(84丁オ)

白紙

「(84丁ウ)

金葉和詞集卷第五

賀部

長治二年三月五日内裏にて竹

不改色といへることをよませた

まへる

堀河院御製

ちよふれとおもかはりせぬかはたけは

なかれてのよのためしなりけり (310)

「(85丁オ)

郁芳門院根合にいはひの心を

よめる

六条右大臣

よろつよはまかせたるへしいはしみつ

なきなかれをきみによそへて (311)

堀河院御時中宮遷堀河院とき

松契遐年といへることをよめる

大納言俊實

【脚】一首／中納言隆俊／男母行任女／以大納言相傳／美乃仍号

美／乃大納言以彼」美乃国申任／男忠高

みつのおもにまつのしつえのひちぬれは

「(85丁ウ)

ちとせはいけのこゝろなりけり (312)

禁中にて翫花といへることをよ

める 中納言實行

こゝのへにひさしくにほへやへさくら

のとけきはるのかせそしらすや (313)

花契遐年といへることをよめる

源師俊朝臣

よろつよとさしてもいはしきくらはな

「(86丁オ)

かさゝむ春しかきりなければ (314)

俊綱朝臣家の哥合にいはひの心

をよめる

藤原國行

【脚】一首 諸陵頭／從五位上内匠／頭有親男／右衛門府竹田／

種理為養子／仍号竹田大夫

をのつからわか身さへこそいはるれ

たれかちよにもあはまほしさに (315)

百首哥のなかに祝のこゝろをよ

める

源俊頼朝臣

「(86丁ウ)

【頭】堀河院百首／也

きみかよはまつのうはゝにをくつゆの

つもりてよものうみとなるまで (316)

祝の心をよめる

大納言経信

きみかよのほとをはしらてすみよしの

まつをひさしとおもひける哉 (317)

後一条院御時弘徽殿女御歌合に

祝の心をよめる

「(87丁オ)

永成法師

【脚】一首／藺城寺僧／越前守源孝／道孫守名(ママ)源／二男

母一条院／女御藤原義／子乳母

君かよはすゑのまつやまはるくと  
こすしらなみのかすもしられす (318)

嘉承二年三月鳥羽殿の行幸

に池上花といへることをよませ

たまひける

堀河院御製

いけみつのそこさへにほふはなさくら

「(87丁ウ)

みるともあかしちよのはるまで (319)

大嘗會主基方辰日參音聲に

つゝみやまをよめる

【頭】讚岐院御時／也

藤原行盛

をとたかきつゝみのやまのうちはえて

たのしきみよとなるそうれしき (320)

悠紀方朝日郷をよめる

【頭】同御時也同辰／日參入音聲／哥也

藤原敦光朝臣

「(88丁オ)

【脚】二首從四位上行／式部大甫右京大夫從四位下東／宮學士明

衡男／母安房守平實／重女

くもりなきとよのあかりにあふみなる

あさひのさとはひかりさしそふ (321)

巳日楽破雄琴郷をよめる

【頭】同御時

まつかせのおとことこのさとにかよふにそ

おさまれるよのこゑはきこゆる (322)

後冷泉院御時大嘗會主基方備

中国二万郷をよめる

藤原家経朝臣

「(88丁ウ)

【脚】一首／木工頭文章／博士讚岐権／介 参議従三／位廣業卿

男 母備中守／橘道時女／實上野守／安倍信行女

みつきものはこふよほろをかそふれは

にまのさとひとかすそひにけり (323)

おなしくにのいなるといへる所を

人にかはりて

高階明頼

【頭】此哥无大嘗會／哥如何

【脚】一首

なはしろのみつはいなるにまかせたり

たみやすけなる君がみよかな (324)

祝のこゝろをよめる

「(89丁オ)

皇后宮肥後

いつとなくかせふくそらにたつちりの

かすもしられぬ君かみよかな (325)

花契週年といへることをよめる

大宰大貳長實

はなもみなきみかちとせをまつなれば

いつれのはるかいろもかはらむ (326)

攝政左大臣中将にて侍りけるころ

「(89丁ウ)

春日祭のつかひにてくたりて侍り

けるに周防内侍をむなつかひに

てくたりけるに為隆卿行事

弁にて侍りけるかもとにをくり

て侍りける

周防内侍

【脚】四首正五位下／仲子周防内／侍(ママ)棟仲女 母／加賀

守従四／位上源正職／女後朱雀院／女房号小馬／内侍

いかはかり神もうれしとみかさやま

ふたはのまつのちよのけしきを (327)

「(90丁オ)

題不知

藤原道経

【脚】一首／参議正三位／右中将兼経／孫正四位下讚／岐守頭綱

男／母隆経女従／五位上前和泉／守入道

きみかよはいくよろつよかゝさぬへき

いつぬきかはのつるのけころも (328)

宇治前太政大臣家の哥合に祝

の心をよめる

中納言通俊

きみかよはあまのこやねのみことより

いはひそゝめしひさしかれとは (329)

大蔵卿匡房

きみかよはかきりもあらしみかさやま

みねにあさひのさゝむかきりは (330)

新院北面にて藤花久匂といへる

ことをよめる

大夫典侍

ふちなみはきみかちとせのまつにこそ

かけてひさしくみるへかりけれ (331)

祝の心をよめる

源忠季

きみかよはとみのをかはのみつすみて

ちとせをふともたえしとそ思 (332)

實行卿家哥合の祝の心を読む

藤原為忠

みつかきのひさしかるへきゝみかよを

あまてる神やそらにしるらむ (333)

前々中宮はしめて内へいらせた

まひけるよ雪のふりて侍りけれ

はつかはしける

宇治前太政大臣

【脚】一首／大入道殿孫／御堂男 母／左大臣雅信女／法興院

ゆきつもるとしのしるしにいとゝしく

ちとせのまつのはなさくそみる (334)

かへし 六条右大臣

つもるへしゆきつもつへしきみかよは

まつのはなさくちたひみるまで (335)

天喜四年皇后宮哥合に祝の

心をよませたまひける

後冷泉院御製

【脚】一首／諱親仁

なかはまのまさこのかすもなにならす

つきせすみゆる君かみよかな (336)

「(90丁ウ)

「(91丁オ)

「(91丁ウ)

「(92丁オ)

松上雪をよめる

源頼家朝臣

「(92丁ウ)

『清輔本金葉和歌集』下冊

・遊紙前に1丁、後に2丁

【脚】一首 藏人／前筑前守従／四位下頼光々々男母従三位

信忠卿女忠／信号美乃三／位

金葉和歌集卷第六

別離部

よろつよのためしとみゆる松のうへに  
ゆきさへつもるとしにもある哉 (337)

兼房朝臣丹後になりてくたり

前斎宮いせにおはしましける

けるひつかはしける

ころいしなとりのいしあはせと

大納言経長

いへることせさせたまひけるに

【脚】一首／右大臣源重信／孫中納言正二／位道方男

祝の心をよめる

きはしろみつにいそくこゝろよ (339)

源俊頼朝臣

かへし

藤原兼房朝臣

くもりなくとよさかのほるあさひには

「(93丁オ)

「(1丁オ)

きみそつかへむよろつよまでに (338)

「(93丁ウ)

よそにきくなはしろ水にあはれわか  
おりたつなをもなかしつるかな (340)

重尹帥下向し侍りけるころ人々

餞し侍りけるときよめる

堀川右大臣

かへるへきたひのわかれとなくさむる

こゝろにかなふなみたなりけり (341)

題讀人不知

「(1丁ウ)

をくれるてわかこひをれはしらくもの  
たなひくやまをけふやこゆらむ (342)

経輔卿つくしへくたり侍りける  
にくしてくたりける時みちより

上東門院に侍りける人のかり

つかはしける

前大宰大貳長房

かたしきのそてにひとりはおかせとも

おつるなみたそよをかさねける (343)

これを御覧してかたはらにかき

つけさせたまひける

上東門院

【脚】二首 彰子／御堂入道殿女

わかれちをけにいかはかりなけくらむ

きくひとさへそゝてはぬれける (344)

源公定か大隅守にてくたりけ

るとき月のあかゝりけるよわか

れをゝしみてよめる

源為成

はるかなるたひのそらにもをくれねは

うらやましきは秋のよの月 (345)

【頭】拾遺集

對馬守にて小槻あきみちかく

たりけるときつかはしける

共政朝臣妻

おきつしまくもゐのきしをゆきかへり

【頭】同集

【脚】友正朝臣女善／滋為政文章／博士従四位上前／能登守従五

／位上善滋保章／男 外記

ふみかよはさむまほろしもかな (346)

俊頼朝臣伊勢國へまかること

ありていてたちけるととき人く

餞し侍りけるによめる

参議師頼

いせのうみをのゝふるえにくちはてゝ

みやこのかたへかへれとそおもふ (347)

源行宗朝臣

まちつけむ我身なりせはかへるへき

ほとをいくたひ君にとはまし (348)

百首のうたのなかにわかれの哥

「へ2丁ウ」

「へ2丁オ」

「へ3丁ウ」

「へ3丁オ」

【頭】堀河院百首／也

の心をよめる

中納言國信

けふはさはたちわかるともたよりあらは  
ありやなしやのなさけわするな (349)

藤原基俊

「4丁オ」

秋きりのたちわかぬる君により  
はれぬおもひにまとひぬる哉 (350)

【頭】同百首

為仲朝臣陸奥守にてくたり

【頭】正四位下筑前守／義道男正四下

けるにひとく餞し侍りけるに  
よめる

藤原實綱朝臣

【脚】一首榮藏人／式部大甫正四／位下前式部／大甫資業卿／男

母備後守／師長女

ひとはいさわかよはすゑになりぬれは  
またあふさかもいかゝこゆへき (351)

「4丁ウ」

藤原有貞

【脚】一首／従五位下淡路／守従三位式部大甫資業孫／正四位下

式部／大甫實綱男／母備後守源／道成女

こひしさはその人かすにあらすとも  
みやこをしのふうちにいれなむ (352)

経衛卿にくしてつくしへまかりけ  
るに公實卿の許へつかはしける

中納言通俊

さしのほるあさひにきみをおもひいてん  
かたふく月に我をわするな (353)

「5丁オ」

かへし

春宮大夫公實

あさひとも君ともわかすつかのまも  
きみをわするゝときしなれば (354)

みちのくにへまかりける時あふさかの  
せきよりみやこへつかはしける

橘則光朝臣

【脚】一首 藏人／陸奥守従四／位上駿河守／敏政男

我ひとりいそくとおもひしあつまちに  
かきねのむめはさきたちにけり (355)

「5丁ウ」

金葉和謔集卷第七

戀部上

五月五日にはしめて女のかりつか

はしける

小一条院

【脚】一首／諱敦明三条／院皇子立太／子院号

しらすりつそてのみぬれてあやめ草  
かゝるこひちにおひむものとは (356)

をむなのかりつかはしける

「(6丁オ)」

大江公資朝臣

しのすゝきうはゝにすかくさゝかにの  
いかさまにせはひとなひきなむ (357)

暁戀をよめる

神祇伯顯仲

さりともとおもふかきりはしのはれて  
とりとゝもにそねはなかれける (358)

つれなかりけるをむなのかりつ

「(6丁ウ)」

かはしける

春宮大夫公實

これにしくおもひはなきをくさまくら  
たひにかへすはいなむしるとや (359)

顯季卿の家にて人々恋のうた

よみけるに読る

藤原顯輔朝臣

あふとみてうつゝのかひはなけれとも

「(7丁オ)」

【頭】譚席講席之時俊頼／感歎云ウツ、ノ／カヒハノ字直千／金

也俊頼哥辛／ハウツ、ニテト左傍記「と」コソ／ヨマシカ

ト云々

はかなきゆめそいのちなりける (360)

をむなのかりつかはしける

源雅光

あふまてはおもひもよらすなつひきの  
いとをしとたにいふときかはや (361)

從二位藤原親子家の造昏合に

恋の心をよめる

宣源法師

「(7丁ウ)」

いまはたゝねられぬいをそともとする

恋しきひとのゆかりとおもへは (362)

【頭】時有難云／不被寝イヲハ／イカ、トモニス／ヘキト云々

大宰大貳長實

おもひやれすまのうらみてねたるよの  
かたしくそてにかゝるなみたを (363)

もの申けるひとのかみをかきこし

てみけるを見てよめる

津守國基

「〈8丁オ〉

頭季卿家にて寄織女恋といへ  
ることをよめる

少将公教母

【脚】少将無益之／条前注了

あさねかみたかたまくらにたわつて  
けさはかたみとふりこしてみる (364)

題よみひとしらす

こひすてふなをたになかせなみたかは

つれなきひとときゝやわたると (365)

なにせむにおもひかけゝむからころも

こひすることはみさほならぬに (366)

中納言雅定

「〈8丁ウ〉

あやしきまでもぬるゝそて哉 (370)

寄夢恋といへることをよめる

左兵衛督實能

あふことはいつとなきさのはまちとり  
なみのたちるにねをのみそなく (367)

あるみやはらに侍りけるひとの

しのひてみやをいてゝもの申て

のちひころありてつかはしける

春宮大夫公實

おもひいつやありしそのよのくれたけは

あさましかりしふしとところ哉 (368)

「〈9丁オ〉

たのめてあはすといへることをよ

める

源頭國朝臣

ケノアサマシカリ／シフシトコロカナ

【脚】四首 右大臣／頭房孫中／納言國信男

「〈10丁オ〉

「〈9丁ウ〉

あひみむとたのむれはこそくれはとり  
あやしやいかゝたちかへるへき (373)

忍恋のこゝろをよめる

中納言實行

たにかはのうへはこのはにうつもれて  
したになかるとひとしるらめや (374)

月前恋といへることをよめる

藤原基光

なかむれはこひしきひとの恋しきに  
くもらはくもれ秋のよの月 (375)

題よみひとしらす

つらしともをろかなるにそいはれける  
いかにうらむと人にきかせむ (376)

もの申けるひとの先々中宮にまい

りにければなこりをこひて月の

あかゝりける夜いひつかはしける

藤原知房朝臣

おもかけはかすならぬみにこひられて  
くもるの月をたれとみるらむ (377)

さはることありてひさしうを

とつれさりけるをんなの許より  
いひをくりて侍りける

読人不知

あさましやなとかきたゆるもしほくさ  
さこそはあまのすさひなりとも (378)

ふみはかりをこせていひたえにけ  
るひとのもとへつかはしける

内大臣家小大進

【脚】三首／前式部丞定／能女  
ふみそめておもひかへりしくれなるの  
ふてのすさひをいかてみせけむ (379)

實行卿家哥合に恋の心を読む

長實卿母

長實卿母

しるらめやよとのつきはしよとゝもに  
つれなきことを恋わたるとは (380)

藤原道経

恋わひてをさふるそてやなかれいつる  
なみたのかはのるせきなるらむ (381)

少将公教母

「〈11丁ウ〉

「〈10丁ウ〉

「〈11丁オ〉

「〈12丁オ〉

「〈12丁ウ〉

なかれてのなにそたちぬるなみたかは  
ひとめつゝみをせきしあえねは (382)

題不知

皇后宮右衛門佐

なみたかはそてのゐせきもくちはてゝ  
よとむかたなき恋もする哉 (383)

源頼国朝臣

かくとたにまたいはしろのむすひまつ  
むすほゝれたるわかこゝろ哉 (384)

女のかりつかはしける

藤原顕輔朝臣

こひすてふもしのせきもりいくたひか  
われかきつらむこゝろつくしに (385)

左兵衛督實能

いのちたにはかなからすはとしふとも  
あひみむことをまたましものを (386)

後朝のこゝろをよめる

源行盛朝臣

つらかりしこゝろならひにあひみても  
なをゆめかとそうたかはれける (387)

堀河院御時艶書合によめる

春宮大夫公實

おもひあまりいかでもらさむおくやまの  
いはかきこむるたにのした水 (388)

恋のこゝろをよめる

藤原顕輔朝臣

としふれと人もすさめぬわかこひや  
くちきのそまのたにのむもれき (389)

あるましき人をおもひかけてよ  
める よみ人しらす

いかにせむかすならぬ身にしたかはて  
つゝむそてよりおつるなみたを (390)

院のくまのにまいらせおはしまし

けるとき御むかへにまいりてたひ

ねのそこつゆけかりければよめる

大宰大貳長實

よもすからくさのまくらにをくつゆは  
ふるさどこふるなみたなりけり (391)

野わきしたりけるにいかゝなど

をとつれたりけるひとのそのゝち

またをともせさりければつかはし

「(13丁ウ)」

「(13丁オ)」

「(14丁オ)」

「(14丁ウ)」

「(15丁オ)」

ける さかみ

【脚】三首／入道一品宮女／房父不詳不／和氏神之由／見家集母

前／能登守慶保／章女公資々／為相模守為妻／仍号相模本

名／乙侍従

あらかりしかせのゝちよりたえぬるは  
くもてにすかくいとにやあるらむ (392)

國信卿家の哥合に夜恋のこゝろ  
をよめる

【頭】散木集云／夜恋云々

源俊頼朝臣

よとゝもにたまちるとこのすかまくら  
みせはや人によはのけしきを (393)

五月五日にわりなくてもりいて

たるところにこもといへるもの

をひきたりしもわすれかた

さにいひつかはしける

さかみ

あやめにもあらぬまこもをひきかけし  
かりのよとのゝわすられぬ哉 (394)

閏五月侍りけるとしひとをかた

らひけるにのちの五月すきてと

まうしければよめる

橘季通

【脚】一首／前駿河守従／五位下陸奥守／従四位上則光／三男母

因幡／守行平女

なそもかくこひちにたちてあやめ草  
あまりなかひくさ月なるらむ (395)

ひとのかりつかはしける

神祇伯顯仲

をのつからよかるゝほととのさむしろは

なみたのうきになるとしらすや (396)

ひとをうらみてつかはしける

藤原惟規

【脚】三首 文章生／藏人 散位従／五位下為時男／母常陸介為

／長女

いけにすむわかなをゝしのとりかへす

ものにもかなやひとをうらみむ (397)

女のもとへまかりたりけるにこよ

ひはかへりねとまうしければかへり

にけるのちひとよはいかゝ思し

「〈15丁ウ〉

「〈16丁オ〉

「〈16丁ウ〉

「〈17丁オ〉

とまうしたりければいひつかはし  
ける  
藤原正家朝臣

なき名たちける人のかりつかは  
しける  
前齋宮内侍

【脚】一首／参議従三位／廣業孫正四／位下式部権／大輔家経男

／母但馬守能／通女

秋かせにふきかへされてくすのはの  
いかにうらみしものとかはしる (398)

あさましやあふせもしらぬなとりかは  
またきにいはずもらすへしやは (402)

かたらひ侍りけるひとのあなち  
にまうさることありければ

左京大夫経忠

いひつかはしける

藤原有教母

「(17丁ウ)

ひとよとはいつかちきりしかはたけの  
なかれてとこそおもひそめしか (403)

したかへはみをはすて、むこ、ろにも  
かなはてとまるなこそおしけれ (399)

俊忠卿家にて恋哥十首よみ  
けるにちかひてあはずといへるこ  
とを人にかはりてよめる

長實卿家哥合に恋のこ、ろをよ

皇后宮式部

める  
藤原忠隆

「(19丁オ)

つゝめともなみたのあめのしるければ  
こひするなをもふらしける哉 (400)

あひみての、ちつらからはよ、をへて  
これよりまさるこひにまとはむ (404)

人をうらみてつかはしける

實行卿家の哥合に恋のこ、ろ  
をよめる

藤原惟規

「(18丁オ)

源俊頼朝臣

しまかせにしはたつなみのやちかへり  
うらみてもなをたのまる、哉 (401)

いつとなく恋にこかる、わか身より  
たつやあさまのけふりなるらむ (405)

「(18丁ウ)

恋哥とてよめる

藤原成通朝臣

〔19丁ウ〕

のちのよとちきりしひともなきものを  
しれはやとのみいふそはかなき (406)

攝政左大臣

いはぬまはしたはふあしのねをしけみ  
ひまなきこひを君しるらめや (407)

かたらひけるひとのかれくになりて  
うらめしかりければつかはしける

白河女御越中

〔20丁オ〕

まちしよのふけしをなに、なけきけむ  
おもひたえてもすくしけるみを (408)

恋のこゝろを人く読けるによめる

律師實源

いのちをしかけてちきりしなかなれは  
たゆるはしぬるこゝちこそすれ (409)

皇后宮美濃

かきたえてほともへぬるをさゝかにの

〔20丁ウ〕

旅宿恋

攝政左大臣

みせはやなきみしのひねのくさまくら  
たまぬきかくるたひのけしきを (411)

堀河院御時艶書會につかまつれ  
る 皇后宮肥後

おもひやれとはてひをふるさみたれに  
ひとりやともるそののしつくを (412)

〔21丁オ〕

皇后宮にて人々恋哥つかまつり  
けるにふみをかへさるゝ恋といへ  
ることをよめる

美の

こふれともひとのこゝろのとけぬには  
むすはれなからかへるたまつさ (413)

人く恋哥よませ侍りけるに  
女にかはりて

〔21丁ウ〕

攝政左大臣

こゝろさしあさちかすゑにをくつゆの  
たまさかにとふ人はたのまし (414)

忍恋といへることをよめる

よみひとしらす

いまはこゝろにかゝらすもかな (410)

しのふれとかひもなきさのあまをふね  
なみのかけてもいまはうらみし(415)

雲居寺哥合に恋の心をよめる

「〈22丁オ〉

三宮大進

なそもかく身にかふはかりおほゆらむ  
あひむむことも人のためかは(416)

寄花恋 攝政左大臣

あたなりしひとのこゝろにくらふれは  
はなもときはのものとこそみれ(417)

百首哥のなかに恋の心をよめる

【頭】堀河院百首也／但題不被知人／恋也

修理大夫顕季

「〈22丁ウ〉

我恋はからすはにかくことのはの

うつさぬほとはしるひともし(418)

攝政左大臣家にて恋のこゝろをよ

める 源雅光

あやにくにこかるゝむねもあるものを  
いかにかはかぬたもとなるらむ(419)

寄山恋をよめる

大中臣公長朝臣

「〈23丁オ〉

こひわひておもひいるさのやまのはに  
いつる月ひのつもりぬる哉(420)

つれなかりけるひとにあふよしの  
ゆめをみてつかはしける

藤原公教

【脚】二首／大納言公實／孫中納言定／行男母修理／大夫顕季女  
うたゝねにあふとみつるをうつゝにて

つらきをゆめとおもはましかは(421)

俊忠卿家にて恋哥十首人々

「〈23丁ウ〉

よみけるにくれともとまらすと

いへることをよめる

源俊頼朝臣

おもひくさはすゑにむすふしらつゆの  
たま／＼きてはてにもかゝらす(422)

女をうらみてつかはしける

春宮大夫公實

あしねはふみつのうへとそおもひしを

「〈24丁オ〉

うきは我身にありけるものを(423)

重服になりたるひとのたちな

からもまうてこむとまうし

たりければつかはしける

橘俊宗女

【脚】 三首／俊宗太皇太后／宮少進從五位／下前備後守／從四位

下俊経／男母義通二／女

たちなからきたりとあはしふちころも

ぬきすてられむ身そとおもへは (424)

恋の心を人にかはりてよめる

「〈24丁ウ〉

先中宮上総

いしはしるたきのみなかみはやくより

をとにきゝつゝ恋わたるかな (425)

皇后宮別當

たのめをくことのはたにもなきものを

なにゝかゝれるつゆのいのちそ (426)

「〈25丁オ〉

白紙

〈25丁ウ〉

金葉和詞集第八

戀部下

初恋のこゝろをよめる

良暹法師

かすめとはおもふこゝろをしるやとて

はるのそらにもまかせたるかな (427)

公任卿家にて紅葉あまのはし

【頭】 前大納言正二位／清慎公孫實頼／廉義公男頼忠」母中務卿

代明／祝主（ママ）女

たて恋と三題を人々によませ

「〈26丁オ〉

侍りけるにをそくまかりてみな

かきけるほとなりければみつの

題をひとつによめる哥

藤原範永朝臣

【脚】 一首 藏人／攝津守正四位／下尾張守中／清男母從三位／

永頼卿女

恋わたるひとにみせはやまつのはも

したもみちするあまのはしたて (428)

後朝恋のこゝろをよめる

源師俊朝臣

「〈26丁ウ〉

しのゝめのあけゆくそらもうつるには

なみたにくるゝものにそありける (429)

月増恋心を

内大臣

いとゝしくおもかけにたつこよひかな

月をみよともちきらさりしに (430)

恋の哥とてよめる

藤原顕輔朝臣

「(27丁オ)

大宰大貳長實

みちのくのおもひしのふにありながら

こゝろにかゝるあふのまつはら (435)

ならの人々百首哥よみけるに

うらみの心をよめる

権僧正永縁

こひわひてねぬよつもれはしきたえの  
まくらさへこそうとくなりけれ (431)

鳥羽殿哥合に恋の心をよめる

藤原仲實朝臣

「(28丁ウ)

おもはむとたのめしひとのむかしにも

あらずなるとのうらめしき哉 (436)

よとゝもにそてのかはかぬわかこひや

としまかいそによするしらなみ (432)

暁恋といへることをよめる

中納言雅定

「(27丁ウ)

恋の心をよめる

隆源法師

【頭】堀河院百首／也但題不遇／恋云

くるゝまもさためなきよにあふことを

いつともしらてこひわたる哉 (437)

蔵人家時かれくになりけるを

うらみていひつかはしける

先中宮越後

ひとこゝろあさゝはみつのねせりこそ

「(29丁オ)

あさましけるもなりにける哉 (434)

皇后宮にて人々哥つかまつりけ

るに恋の心をよめる

「(28丁オ)

こるはかりにもつまゝほしけれ (438)

俊忠卿家にて恋哥十首人々に

よませ侍りけるによめる

## 修理大夫顕季

わきもこかこゑたちきゝしからころも  
そのよのつゆにそてはぬれにき(439)

我をはかれくになりてこと人の  
かりまかるときゝてつかはしける

「(29丁ウ)

## 題不知

先中宮上総

「(30丁ウ)

さきのよのちきりをしらてはかなくも  
ひとをつらしとおもひけるかな(444)

恋哥よみけるところにてよめる

源俊頼朝臣

## 読人不知

ことはりやおもひくらふのやまさくら  
にほひまされるはなをめつるも(440)

郁芳門院の根合に恋のこゝろをよ  
める

## 周防内侍

恋わひてなかむるそらのうきくもや  
我したもえのけふりなるらむ(441)

人をうらみて五月五日つかはしける

「(30丁オ)

わすれくさしけれやとをきてみれば  
おもひのきよりおふるなりけり(445)

ひとをうらみてよめる  
よみひとしらす

「(31丁オ)

いまよりはおもひもいてしうらめしと  
いふもたのみのかゝるかきりそ(446)

逢不逢恋の心をよめる  
左兵衛督實能

## 前斎宮河内

あふことのひさしにふけるあやめ草  
たゝかりそめのつまとこそみれ(442)

恋のこゝろをよめる

## 大宰大貳長實

つらきおもおもひもしらぬ身のほとに  
恋しさいかてわすれさるらむ(443)

読人不知

おもひきやあひみしよはのうれしさに  
のちのつらさのまさるへしとは(447)

ひとをうらみけるころれいなら  
すおほえければいひつかはしける

「(31丁ウ)

【脚】意尊哥也／号藏人君

あはすともなからむよにはおもひいてよ  
われゆへいのちたえし人そと(448)

女のかりつかはしける

藤原永實

するすみもおつるなみたにあらはれて  
こひしとたにもえこそかゝれぬ(449)

家哥合に初恋の心をよめる

中納言國信

いろみえぬこゝろはかりはしつむれと  
なみたはえこそしのはさりけれ(450)

題よみひとしらす

あふことはゆめはかりにてやみにしを  
さこそみしかとひとにかたるな(451)

大納言経信

あしかきにひまなくかゝるくものいの

ものむつかしくしけるわかこひ(452)

藤原忠隆

をさふれとあまるなみたはもるやまの  
なけきにおつるしつくなりけり(453)

人をうらみてなけき侍りける

ころ月をみてよめる

橘俊宗母

いかにせむなけきのもりはしけゝれと

このまの月のかくれなきよを(454)

ものまうしけるひとのひさしう

をともせさりければつかはしける

前齋院肥前

かやふきのこやわすらるゝつまならむ

ひさしく人のをとつれもせぬ(455)

人のかりつかはしける

左兵衛督實能

わかこひのおもふはかりのいろにいては

いはても人にみえましものを(456)

もろともにほとゝきすをまちけ

る人さはる事ありていりにける

のちまたいてゝなきつやとたつね

ければ

ほとゝきすくもゐのよそになりしかは

われそなこりのそらになかれし(457)

春宮大夫公實

「〈32丁ウ〉

「〈32丁オ〉

「〈33丁オ〉

「〈33丁ウ〉

「〈34丁オ〉

冬恋といへることをよめる

藤原成通朝臣

みつのおもにふるしらゆきのかたもなく  
きえやしなまし人のつらさに (458)

多聞といへるわらはをよひにつか  
はしたりけるひみえさりければ  
月のあかゝりけるよゝめる

権僧正永縁

まつひとのおほそらわたる月ならば  
ぬるゝたもとにかけはみてまし (459)

寄水鳥恋 攝政右大臣

あふこともなこ江にあさるあしかもの  
うきねをなくと人はしらすや (460)  
ひとをうらみてよめる

藤原盛経母

さのみやはわか身のうきになしはてゝ

ひとのつらさをうらみさるへき (461)

攝政左大臣家にて恋のこゝろをよ

める 源雅光

なにたてるあはてのうらのあまたにも

みるめはかつくものところそきけ (462)

うらめしき人のあるにつけても

むかし思ひいてらるゝことありて  
よめる 前斎宮甲斐

いまひとのこゝろをみわのやまにてそ  
すきにしかたはおもひしらるゝ (463)

わすれにし人のおもひいてゝをと  
つれたりけるにいひつかはしける

橘俊宗女

めつらしやいはまによとむわすれみつ  
いくかをすきておもひいつらむ (464)  
山の哥合に恋のこゝろをよめる

読人不知

「(35丁オ)

【脚】慈雲坊天／行真哥也／本云此名於／会者有憚／後白河院御

／名也

たまさかにあふよはゆめのこゝちして  
恋しもなとかうつゝなるらむ (465)

いかてかとおもふ人のさもあらぬ

さきにさそなとひとのまうし

ければよめる

「(35丁ウ)

「(36丁オ)

## 中原章経

こひわふるきみにあふてふことは、

「〈36丁ウ〉

こそといふ人なりといふをきゝて  
いひつかはしける

「〈37丁ウ〉

いつはりさへそうれしかりける (466)

## 源縁法師

伊賀少将か許へつかはしける  
中納言資仲なきくよりかねてもうつるこゝろかな  
いかにしてかはあふへかるらむ (470)

よものうみのうらくゝことにあされとも

恋の心をよめる

あやしくみえぬいけるかひかな (467)

## 民部卿忠教

かへし  
伊賀少将こひわひてたえぬおもひのけふりもや  
むなしきそらのくもとなるらむ (471)

【脚】一首／祐子内親王女／房本母儀中／宮女房縫殿／頭従五位

上藤／原顕長女母字治前／大乗大臣房顕長為／伊賀守之時／為妻仍号

伊賀「少将

女のかりつかはしける

「〈38丁オ〉

たまさかになみのたちよるうらくゝは

## 大納言経信

なにのみるめのかひかあるへき (468)

「〈37丁オ〉

あふことはいつともなくてあはれ我  
しらぬいのちにとしをふる哉 (472)題不知  
上総侍従ひとつのもとにて女房のなかにへママかみ  
をうちいたしてみせければよめる

【脚】一首

あさましくなみたにかふ我身哉

## 藤原顕綱朝臣

こゝろかろくはおもはさりしを (469)

人しれすおもふこゝろをかなへなむ

ものへまかりけるみちにはした

神あらはれてみえぬとならは (473)

「〈38丁ウ〉

ものゝあひたりけるをとはせ侍

りければ上東門院に侍るすまひ

堀河院御時艶書會によめる

中納言俊忠

ひとしれぬおもひありそのうらかせに  
なみのよるこそいはまほしけれ (474)

かへし 一宮紀伊

をとにきくたかしのうらのあたなみは  
かけしやそてにぬれもこそすれ (475)

くれにはかならずとたのめたりける

ひとのはつかの月のいつるまで  
みえさりければよめる

攝政家堀河

【脚】一首

ちきりをきし人もこそすゑのこのまより  
たのめぬ月のかげそもりくる (476)

こゝろかはりたる人のもとへつかは

しける 江侍従

めのまへにかはるこゝろをなみたかは

なかれてやともおもひける哉 (477)

國信卿家哥合に初恋のこゝろを

よめる 源兼昌

けふこそはいはせのもりのしたもみち

いろにいつれはちりもしぬらむ (478)

ゆきのあしたに出羽弁か許より  
かへり侍りけるにかれよりをくり  
て侍りける

出羽弁

【脚】一首

平／季信女母前備後四位上源致遠女／本母儀中宮／女房前出羽／守従五位下

をくりてはかへれとおもひしたましひの  
ゆきさすらひてけさはなき哉 (479)

かへし 大納言経信

冬のよのゆきけのそらにいてしかと

かけよりほかにをくりやはせし (480)

すみかをしらせぬ恋といへること

を讀る 前齋院六条

「(39丁ウ)

ゆくゑなくかきこもるにそひきまゆの

いとふ心のほとはしらるゝ (481)

よにあらむかきりはわすれし

なとちきりけるひとのひさしう

をとつれさりければ讀る

讀人不知

「(40丁ウ)

「(40丁オ)

ひとはいさありもやすらむわすられて  
とはれぬ身こそなき心ちすれ (482)

「(41丁オ)

人の許より袖のぬるゝさまをみ  
せはやとまうしたりければよめ  
る  
皇后宮少将

とところもの申けるひとのたえ  
てをとつれさりければつかはし  
ける

はやくよりあさきこゝろとみえしかは  
おもひたえにきやまはかのみつ (483)

うらむともみるめもあらしものゆへに  
なにかはあまのそてぬらすらむ (487)  
旅宿恋といへることをよめる  
【頭】堀河院百首也

修理大夫顕季

「(42丁ウ)

題不知

もらさはやほそたにかはのむもれ水  
かけたにみえぬ恋にしつむと (484)

「(41丁ウ)

こひしさをいもしるらめやたひねして  
やまのしづくにそてぬらすとは (488)  
人のゆふかたまうてこむとまうし  
たりければよめる  
一宮紀伊

おとこのけふはかたゝかへにもの  
へまかるといはせて侍りければつか  
はしける

きみこそはひとよめくりの神ときけ  
なにあふことのかたゝかふらむ (485)

あしたの恋の心をよめる

うらむなよかけみえかたきゆふつくよ  
おほろけならぬくもまゝつ身そ (489)  
蔵人にて侍りけるころうちをわ

「(43丁オ)

藤原顕輔朝臣

あつさゆみかへるあしたのおもひには

「(42丁オ)

りなくいてゝ女のかりまかりて  
よめる  
藤原永實

ひきくらふへきことのなき哉 (486)

みか月のおもろけならぬこひしさに  
われてそいつるくものうへより (490)

周防内侍したしくなりてのち

ゆめくこのこともらすなと申

ければよめる

【頭】信宗勤仕賀茂／祭使時風流雜／色四十人着襲／装束左右牛

童者着胡飲／酒装束輪大／鼓車樂屋笠／松樹藤花開／數云

云

源信宗朝臣

「〈43丁ウ〉

【脚】一首／前備中守正／四位下小一条／三男母下野」守從五位

下／政隆女号院／中将

あはぬまはまとろむほとあらはこそ

ゆめにもみきと人にかたらめ(491)

なきなといへることをよめる

左京大夫経忠

人しれすなきなはたてとからころも

かさねぬそてはなをそこひしき(492)

人をうらみてよめる

大中臣輔弘女

「〈44丁オ〉

【脚】二首 散位從／五位下神祇權／大副從五位下／輔宣男 母

／公資々々女

あちきなくすくる月ひそうらめしき

あひみしほとをへたつとおもへは(493)

三井寺にて人々恋哥よみける

に読る

僧都公円

【脚】一首／中納言定頼／孫中納言経／家男号真／如院僧都三

井寺僧

つらしともおもはむ人はおもひなむ

われなれはこそみをはうらむれ(494)

かたらひけるをむなのもとに

まからむとまうしたりけれと

「〈44丁ウ〉

さはることありてえまからさり

ければさみたれのころをくりて

侍りける

読人不知

さみたれのそらたのめのみひまなくて

わすらるゝなそよにふりぬへき(495)

かへし

右兵衛督實能

わすられむなはよにふらしさみたれも

いかてかしはしおやまさるへき(496)

「〈45丁オ〉

題読人不知

あまくものかへしのかせのをとせぬは

おもはれしとのこゝろなるへし(497)

あしひきのやまのまに／＼たふれたる  
からきはひとりふせるなりけり (498)

みくまのゝこまのつまつくあをつゝら

きみこそまろかほたしなりけれ (499)

つのくにのまろやは人をあくたかは

きみこそつらきせゝはみえしか (500)

あふみてふなはたかしまにきこゆれと

いつらはこゝにくるものとさと (501)

かさとりのやまによをふるみにしあれば

すみやきもをるわかこゝろ哉 (502)

こりつむるなけきをいかにせよとてか

きみにあふこのひとすちもなき (503)

あふこなきものとしる／＼なにゝかは

なけきをやくとこりはつむらむ (504)

うとましやこのしたかけのわすれみつ

いくらこのひとのかけをみつらむ (505)

はかるめることの上におほかれは

そらなけきをはこるにやあるらむ (506)

あふことのいまはかたみのめをあらみ

もりてなかれむなこそおしけれ (507)

「〈45丁ウ〉

あふことはかたねふりなるいそひたひ

ひねりふすともかひやなからむ (508)

あふことのかたのいまはなりぬれは

おもふかりのみゆくにやあるらむ (509)

あふみにかありといふなるかれるやま

きみはこえけりひとゝねくさし (510)

あふことはなからふるやのいたひさし

さすかにかけてとしのへぬらむ (511)

かしかましやまのしたゆくさゝれみつ

【頭】六帖云／オトナシノ

あなかまわれもおもふこゝろあり (512)

ぬすひとゝいふもことはりさよなかに

きみかこゝろをとりにつれたれは (513)

はなうるしこやぬるひとのなかりける

あなはらくろのきみかこゝろや (514)

寄石恋といへることをよめる

前斎宮六条

あふことをとふいしかみのつれなさに

わかこゝろのみうこきぬる哉 (515)

「〈46丁オ〉

「〈46丁ウ〉

「〈47丁オ〉

「〈47丁ウ〉

攝政左大臣家にて人々恋の心を  
よみけるによめる

源雅光

かすならぬみをうちかはのはしくと  
いはれなからも恋わたる哉(516)

恋哥十首人々よみけるにくれと  
もと々まらすといへることをよめる

「(48丁オ)

攝政左大臣家にてとき々あへり  
といへることをよめる

源顕國朝臣

「(49丁オ)

わかこひはしつのはしけいとすちよはみ  
たえまはおほく々るはすくなし(521)

恋のうた人々よみけるによめる

源俊頼朝臣

修理大夫顕季

たまつしまきしうつなみのたちかへり  
せないてましぬなこりさひしも(517)

恋哥とてよめる

春宮大夫公實

あふことはふな人よはみこくふねの  
みをさかのほるこちこそすれ(518)

顕仲卿女

「(48丁ウ)

金葉和詞集卷第九

雑部上

むかし道方卿にくして筑紫にま  
かりて安樂寺にまいりてみ侍り

けるみきりの梅の我おりにま

いりてみれば木のかたはおなし

さまにてはなのおひ木になり

てところくさきたるをよめる

「(50丁オ)

内大臣家小大進

かくはかりこひのやまひはおもけれと  
めにかけさせてあはぬきみ哉(520)

## 大納言経信

神かきにむかし我みしむめのはな  
ともにおいきとなりけるかな (523)

山家鷲といへることを

## 攝政左大臣

やまさともうきよのなかをはなれねは  
たにのうくひすねをのみそなく (524)

円宗時の花を御覧して後三条

【頭】後三条院御／願有仁和寺

院の御事などおほしいて、よ  
ませたまへる

## 三宮

うゑをきしきみもなきよに年へたる  
はなは我身のこゝちこそすれ (525)

花見御幸みていもうとの内侍の  
許へつかはしける

## 権僧正永縁

ゆくすゑのためしとけふをおもふとも  
いまいくとせか人にかたらむ (526)

返し 妹内侍

いくちよも君そかたらむつもりゐて  
おもしろかりしはなのみゆきを (527)

大峯にておもひかけす花の  
さきたりけるをみてよめる

## 僧正行尊

もろともにあはれとおもへやまさくら  
はなよりほかにしるひともなし (528)

堀河院御時殿上の人々あまたくし  
てはなみありきけるに仁和寺に行  
宗朝臣ありときゝて檀昏やある  
とたつねて侍りければつかはす  
とてうへにかきつけ侍りける

## 源行宗朝臣

いくとせにわれなりぬらむもろひとの  
はなみるはるをよそにきゝつゝ (529)

山家に人々まかりて花哥よみけ  
るによめる

## 源定信

みなひとはよしのゝやまのさくららはな  
おりしらぬ身やたにのむもれき (530)

「〈50丁ウ〉

「〈51丁ウ〉

「〈51丁オ〉

「〈52丁オ〉

後三条院かくれおはしまして

「〈52丁ウ〉

隆家卿大宰帥にふたゝひなり

【頭】大入道殿兼家／孫／町尻殿道隆／男 母成忠卿／女 前中

またのとしの春さかりなるはな  
をみてよめる

左近将曹秦兼方

こそみしにいろもかはらすききにけり  
はなこそものはおもはさりけれ (531)

つかさめしのころよろつうらや

ましきことのみきこえければ

よめる 藤原顕仲朝臣

「〈53丁オ〉

ちはやふるかしののみやのすきのはを  
ふたゝひかさす我君そきみ (534)

「〈54丁オ〉

としふれとはるにしられぬむもれきは  
はなのみやこにすむかひそなき (532)

蔵人おりて臨時祭陪従し侍り

けるに右中弁伊家か許へつか

はしける

藤原惟信朝臣

【脚】一首／正五位下中宮大／進保相孫正四／位下皇居宮／権亮

資良男／正四位下主殿頭／母大和守良資／女良資兼任 伊

賀丹波仍／称伊賀丹波

やまふきもおなしかさしのはなゝれと

くもるのさくらなをそこひしき (533)

「〈53丁ウ〉

ひつかはしける

藤原家綱

としをへてかよふやまちはかはらねと  
けふはさかゆくこゝちこそすれ (535)

「〈54丁ウ〉

【脚】前周防守従四／位上頼祐孫従／四位下備後守／實能男 母

／能通朝臣女／良門内舎人流兼輔中納言／末葉也陪従／狂

者也行綱／兄也

おもひかねけさはそらをやなかむらむ

くものかよひちかすみへたて、(536)

一品宮天王寺にまいらせたまひて

ひころ御念佛せさせたまひ

けるにおほむともの人々すみよ

しにまいりて哥よみけるによめる

「〈55丁オ〉

源俊頼朝臣

いくかへりはなさきぬらむすみよしの

まつも神よのものとこそきけ(537)

田家老翁といへることをよめる

中納言基長

ますらをはやまたのいほにおひにけり

いまいく秋にあはむとすらむ(538)

仁和寺にすませたまひけるこ

「〈55丁ウ〉

ろいつまできてはなと人のたつ

ねまうしたりければよませた

まへる 三宮

かくてしもえそすむましきやまさとの

ほそたにかはのこゝろほそさに(539)

笙のいはやにてよめる

僧正行尊

草のいほをなにつゆけしとおもひけむ

「〈56丁オ〉

もらぬいはやもそてはぬれけり(540)

良暹法師をうらむることあり

けるころむつきのついたちにま

てきてまたひさしうみえさり

ければつかはしける

律師慶範

【脚】一首／横河大供奉／也

春のこしそのひつらゝはとけにしを

またなにことにとゝこほるらむ(541)

「〈56丁ウ〉

對山待月といへることをよめる

藤原正季

このよにはやまのはいつる月をのみ

まつことにもやみぬへき哉(542)

山里にてありあけの月をみて

よめる 僧正行尊

このまもるかたわれ月のほのかにも  
たれかわか身をおもひいつへき (543)

「〈57丁オ〉

宇治前太政大臣ときのうたよみと

もをめして月のうたよませ侍り

けるにもれて公實卿の許へ

つかはしける

源師光

かすかやまみねつゝきてる月かけに

しられぬたにのまつもありけり (544)

僧都頼基光明山にこもりぬと

「〈57丁ウ〉

きゝて月のあかゝりけるよつか

はしける 橘能元

【脚】 樂所預也榮／職江記如此高／橘太也能因／孫元任子也／從四位

下出家

うらやましようきよをいてゝいかはかり

くまなきみねの月をみるらむ (545)

かへし 僧都頼基

【脚】 号光明山僧都／一首／參議從二位侍／從源基平男／母権右

中弁／義忠女義忠／入吉野河死去／了參詣全峯／山之間也

もろともにしへやゆくと月かけの

くまなきみねをたつねてそこし (546)

郁芳門院伊勢におはしまし

「〈58丁オ〉

けるころあからさまにくたりけ

るにすゝかゝはをわたりけるとき

よめる

六条右大臣北方

【脚】 三首／治部卿隆俊／女

はやくよりたのみわたりしすゝかゝは

おもふことなるをとそきこゆる (547)

源仲正かむすめ皇后宮にはし

めてまいりたりけるにことひく

なりときかせたまひて御ことを

「〈58丁ウ〉

とりいたさせたまひてすゝめ

させたまひければつゝましな

からひきならしけるをきゝて

くちすさひのやうにいひかけゝ

る

攝津

ことのねやまつふくかせにかよふらむ

ちよのためしにひきつへき哉 (548)

かへし

美の

「〈59丁オ〉

うれしくもあきのみやまのまつかせに  
うることのねのかよひける哉(549)

人のことひくをきゝてよめる

内大臣家越後

ことのねは月のかけにもかよへはや  
そらにしらへのすみのほるらむ(550)

伊勢國のふたみのうらにてよ

める

大中臣輔弘

【脚】前女子所注了

たまくしけふたみのうらのかひしけみ  
まきゑにみゆるまつのむらたち(551)

宇治前太政大臣布引瀧みにまかり  
たりけるとともにまかりてよめる

大納言経信

しらくもとよそにみつれはあしひきの  
やまもとゝろにおつるたきつせ(552)

讀人不知

【脚】源清哥云々／清ハ綱男

あまのかはこれやなかれのすゑならむ  
そらよりおつるぬのひきのたき(553)

「〈59丁ウ〉

選子内親王いつきにおはしまし  
けるとき女房にもまうさむと  
てしのひてまいりたりけるに  
さふらひともいかなるひとそと  
とはせ侍りければたゝうかみに  
かきてをかせ侍りける

藤原惟規

「〈60丁ウ〉

かみかきはきのまろとのにあらねとも  
なのりをせぬは人とかめけり(554)

郁芳門院伊勢におはしまし

けるときあからさまにくたり

侍りけるにおもひかけすかねの

こゑのほのかにきこえければよめ

る 六条右大臣北方

「〈61丁オ〉

「〈60丁オ〉

神かきのあたりとおもふにゆふたすき

おもひもかけぬかねのこゑ哉(555)

前斎宮いせにおはしましける

とき寮頭保俊御祭の程とのる

ものゝれうにきぬをかりてほと

すきてこれをいまゝてかへさゝ

りける事なとまうしたり

けるかへりことにいひつかはしける 「〈61丁ウ〉

【頭】 白河院女号六／角齋宮善子／藤原保俊前／右衛門佐忠俊／

男右兵衛督／良頼孫

内侍

かへさしとかねてしりにきからころも

こひしかるへきわか身ならねは (556)

和泉式部保昌にくして丹後

【頭】 大納言藤原／元方儲者孫右馬／權頭從四位下／致忠男

に侍りけりころみやこに哥合は

へりけるに小式部内侍うたよみに

とられて侍りけるを定頼卿つ

ほねのかたにまうてきて哥は 「〈62丁オ〉

いかゝせさせたまふ丹後へは人

つかはしてけむやつかひまたま

うてこすやなとたはふれて

たちけるをひかへてよめる

小式部内侍

【脚】 上東門院女房／前陸奥守從／五位上橘道貞／女 母和泉式

部

おほえやまいくのゝみちのとほければ

またふみもみすあまのはしたて (557)

しほゆあみににしのうみのかたへ 「〈62丁ウ〉

まかりたりけるにみるといふものを

身つからとりてみやこに侍りける

むすめのかりつかはすとてよめる

平康貞女

いそなつむいりえのなみのたちかへり

きみゝるまてのいのちもかな (558)

かへし むすめ

なかるするあまのしわざとみるからに 「〈63丁オ〉

そてのうらにもみつなみた哉 (559)

百首哥のなかに夢のこゝろを讀る

修理大夫顯季

【頭】 堀河院百首

うたゝねのゆめなかりせはわかれにし

むかしのことをまたみましやは (560)

旅宿の心をよめる

参議師頼

さよなかにおもへはかなしみちのくの 「〈63丁ウ〉

あさかのぬまにたひねしてけり (561)

この集撰しけるときうたこはれ  
てをくるとてよめる

藤原顕輔朝臣

いゑのかせふかぬものゆへはつかしの  
もりのことのはちらしはてつる (562)

式部いしやまにまいりけるに大

津にとまりてよふけてき、け

「(64丁オ)」

れはひとのけはひあまたして

の、しりけるをたつねければ下人

のよねしらせ侍るなとまうし

けるをき、てよめる

和泉式部

【脚】上東門院女房／越前守正四位下／大江雅致女或／説中納言

懐平／女云々母越中／守正四位下平／保衡女太皇／太后宮

昌子内／親王乳母 和／泉守橘道貞／為妻仍号和泉」式部

童名御／許丸

さきのゐるまつはらいかにさはくらむ

しらせはうたてさと、よみけり (563)

公實卿のもとにまかりたりけ

「(64丁ウ)」

るに侍らさりければ出居にをき

たりける小弓をとりてさふら

ひにかくとふれていてにけりかの

卿かへりて弓をたつねければ

時房をろしてまかりぬとまうすを

き、ておとろきて院の御弓そと

くをこせよといひにつかはしたり

ければ御弓にむすひつかけたりけ

「(65丁オ)」

る哥

藤原時房

【脚】散位従五位下／上野守従四位／下成経男母／紀伊守源致／

時女

あつさゆみさこそはそりのたか、らめ

はるほともなくかへるへしやは (564)

おとこかれくになりて程へて

たかひにわすれてのち人にした

しくなりにけりなとまうすと

き、てなけきけるにかはりて

よめる

春宮大夫公實

「(65丁ウ)」

なきなにそ人のつらさはしられける

わすられしにはみをそうらみし (565)

大貳資通しのひてものまうし

【頭】時中孫濟政男／時中ハ左大臣／雅信男

けるをほとなくさそなと人の

申ければよめる

さかみ

いかにせむやまたにかこふかきしはの  
しはしのまたにかくれなきみを (566)

肥後内侍おとこにわすられてな

けくを御覽してよませたまひ

ける 堀河院御製

わすられてなけくたもとをみるからに

さもあらぬそてのそほちぬる哉 (567)

水くるまをみてよめる

僧正行尊

はやきせにたゝぬはかりそみつくるま

われもうきよにめくるとをしれ (568)

れいならぬ事ありてわつらひけ

るところ上東門院にかうしたて

まつるとて人にかゝせてたてま

つりける

堀河右大臣

つかへつるこのみのほとをかそふれは

あはれこすゑになりける哉 (569)

御かへし

上東門院

「(66丁オ)

すきゝつるつきひのほともしられつゝ

このみを見るもあはれなる哉 (570)

僧正行尊まうてきてよるとゝ

まりてつとめてかへるとてとこを

わすれたりけるをかへしつかは

すとしてよめる

大納言宗通

「(67丁ウ)

【脚】一首／堀河右大臣孫／大宮右大臣男」母備前守源／兼長女

正二位／大納言中宮大／夫民下卿

「(66丁ウ)

くさまくらさこそはたひのどこならめ

けさしもをきてかへるへしやは (571)

おとこ心かはりてまうてこすなり

にけるのちをきたりけるゑふく

ろをとりにをこせたりければか

きつけてつかはしける

桜井尼

のきはうつましろのたかのゑふくろに

「〈68丁オ〉

とりのこのまたかひなからあらませは  
をはといふものはおいゝてさらまし (574)

をきゑをさゝてかへしつる哉 (572)

百首哥のなかに山里をよめる

後冷泉院御時近江國よりしろき

修理大夫顯季

からすをたてまつれりけるをか

ひくらしのこゑはかりするしはのとは

くしてをかせたまひたりけるを

いりひのさすにまかせてそみる (575)

女房たちゆかしかり申ければ

題不知 藤原仲實朝臣

をのくうたをよみてたてまつれ

としふれはわかいたゝきにをくしもを

さてよくよみたらむ人にみせむ

くさのうゑともおもひける哉 (576)

とおほせことありければつかまつ

殿上おりたりけるころ人の殿上

れる

少将内侍

しけるをみてよめる

【脚】従四位下儀子／前能登守／従五位上藤原／實房女 母／祭

源行宗朝臣

主輔親女

たくひなきよにおもしろきとりならば

うらやましくものかけはしたちかへり

ゆかしからすとたれかおもはむ (573)

ふたゝひのほるみちをしらはや (577)

かひのくによりのほりてをはなる

殿上まうしけるにせさりければ

人のもとにありけるをはかなき

よめる 平忠盛朝臣

ことにてなありそとてをいゝた

おもひきやくもるの月をよそにみて

しければよめる

こゝろのやみにまとふへしとは (578)

よみひとしらす

「〈69丁オ〉

かたらひ侍りけるひとのかれくになりければことひとつけてつ

「〈70丁オ〉

「〈69丁ウ〉

くしのかたへまかりなむとしける  
をきゝておとこのもとよりまかるま  
しきよしをまうしたりければ

いひつかはしける

内大臣家小大進

身のうさもとふひともしにせかれつゝ  
こゝろつくしのみちはとまりぬ (579)

おとこのなかりけるよことひとをつ  
ほねにいれたりけるにもとのおとこ  
まうてきあひたりければきはき  
てかたはらのつほねのかへのくつ  
れよりくゝりてにかしやりて

またのひそのにかしたるつほね  
のぬしのかりよへのかへこそうれ  
しにしかなとまうしたりしかは  
いひつかはしける

読人不知

ねぬるよのかへさはかしくみえしかと  
わかちかふれはことなかりけり (580)

源頼家かものまうしける人の

【頭】正四位下筑前守母平納言／雅仲女／此哥在後拾遺

五節にいてゝ侍りけるをきゝて

まことにやあまたかさねしを

みころもとよのあかりのかくれな

きよにとよみてつかはしたりける

かへしによめる

源光綱母

【脚】一首／系図説満綱／也号九条判官／代  
ひかけにはなきなたちけりをみころも  
きてみよとこそいふへかりけれ (581)

「(71丁オ)

経信卿にくしてつくしにまかり

たりけるに肥後守盛房かの

たちのあるみせむとまうしてを

ともせさりければいかにとおとろかし

たりければわすれたるよしを

まうしたりければいひつかはし

ける

源俊頼朝臣

「(72丁ウ)

「(71丁ウ)

なきかけにかけゝるたちもあるものを

さやつかのまにわすれはてける (582)

おほみねに神仙といへるところに

ひさしう侍りければ同行ともみ

なかきりありてまかりにければ心

ほそさによめる

僧正行尊

みし人はひとりわか身にそはねとも

をくれぬものはなみたなりけり (583)

たゝならぬ人のもとにくしてあり

けるこをうみてけるかもとより

うみたる梅をゝこせたりけれ

はよめる

読人不知

はかくれにつはるとみえしほともなく

こはうみうめになりにける哉 (584)

堀河院御時中宮の女房たちを亮

仲實朝臣か紀伊守にて侍りける

ときわかのうらみせむとてさそひ

ければあまたまかりけるにまからて

つかはしける

前中宮甲斐

ひとなみにこゝろはかりはたちそひて

さそはれぬわかのうらみをそする (585)

保實卿ほかにうつりてのちかの

【頭】保實ハ中納言ノ從二位公成孫ノ大納言正二位ノ實基ノ左傍

記「ゝ」季男ノ母経平女ノ保實卿云此哥父男誦ナラムト

云々不致驚云々

もとのところにつねにみ侍りける

かゝみとかせ侍りけるかくらきよし

をまうしけるをきゝてよめる

藤原實信母

【脚】保實卿男ノ讚岐守顯ノ綱女

ことはりやくもれはこそはますかゝみ

うつりしかけもみえすなるらめ (586)

月のいるをみてよめる

源師賢朝臣

にしへゆくこゝろはわれもあるものを

ひとりないりそ秋のよの月 (587)

為仲朝臣陸奥守にて侍りける時

延任しつときゝてつかはしける

「73丁ウ」

「73丁オ」

「74丁ウ」

「74丁オ」

## 藤原隆資

まつわれはあはれやそちになりぬるを  
あふくまかはのとほさかりぬる (588)

「(75丁オ)」

といへることをよめる

## 源雅光

むかしにもあらぬすかたになりゆけと  
なけきのみこそおもかはりせぬ (592)

青黛畫眉々細長といへることを

よめる

## 源俊頼朝臣

さりともとかくまゆすみのいたつらに

「(76丁ウ)」

## 藤原實光朝臣

みかさやま神のしるしのいちしるく  
しかありけりとさくそうれしき (589)

屏風のゑにしかすかのわたりゆく

ひとのたちわつらふかたかける

「(75丁ウ)」

こゝろほそくもおいかける哉 (593)

としひさしく修行しあるきて

くまのにて験くらへしけるを祐

家卿まいりあひてみけるにこと

のほかにやせおとろえてすかたも

あやしけにやつれたりければみわ

すれてかたはらなるそうにいかな

る人そとことのほかにしるし

「(77丁オ)」

ところをよめる

## 藤原家経朝臣

ゆくひともたちそわつらふしかすかの  
わたりやたひのとまりなるらむ (590)

題讀人不知

みのうさをおもひしとけはふゆのよも

とゝこほらぬはなみたなりけり (591)

上陽人苦最多少苦老たる苦

「(76丁オ)」

けるをきゝてよめる

ありけなるひとかなゝとたつね

## 僧正行尊

こゝろこそよをはすてしかまほろしの

すかたも人にわすられにけり (594)

大中臣輔弘祭主もあかさりける

ころ祭主になさせたまへると大

神宮にまうしくねいたり

「(77丁ウ)

けるよのゆめにまくらかみにし

られぬ人のたちてよみかける

哥

くさのはのなひくもまたすつゆの身の

をきところなくなけくこのころ (595)

六条右大臣六条のいゑつくりて

いつみなとほりてとくわたりて

みよなとまうしたりければ読る

「(78丁オ)

顯雅卿女

【脚】伊綱女号／信乃

ちとせまてすまむいつみのそこによも

かけをならへむとおもひしもせし (596)

宇治平等院の寺主になりて宇

治にすみつきてひえのやまの

かたをなかめやりてよめる

忠快法師

うちかはのそのみくりとなりなから

「(78丁ウ)

なをくもかゝるやまそこひしき (597)

家を人にはなちてたつとて

はしらにかきつけ侍りける

周防内侍

すみわひてわれさへのきのしのふくさ

しのふかたくしけきやとかな (598)

賀茂成助にはしめてあひてもの

まうしけるついてにかはらけと

りてよめる

津守國基

きゝわたるみたらしかはのみつきよみ

そこのこゝろをけふそみるへき (599)

皇后宮弘徽殿におはしましけ

るころ俊頼にしをもてのほそ

とのにてたちなから人にもものま

うしけるによのふけゆくまゝに

くるしかりければつちにゐたり

けるをみてたゝみをしかせはや

「(79丁ウ)

と女のまうしければたゝみはいし  
たゝみしかれてはへりとまうす  
をきゝてよめる

皇后宮大貳

いしたゝみありけるにはをきみにまた  
しくものなしとおもひける哉(600)

「(80丁オ)

大原行蓮聖人か許へこそてつ

かはすとてよめる

天台座主仁覺

【脚】一首／土御門右大臣／師房三男号一／条房和尚又／号梶井

座主

あはれはむとおもふこゝろはひろけれと

はくゝむそてのせはくもある哉(601)

百首哥のなかに述懐の心をよめ

【頭】堀河院百首也短哥反哥也

る

源俊頼朝臣

よのなかはうきみにそへるかけなれや

「(80丁ウ)

おもひすつれとはなれさりけり(602)

おとこにつきて越前國にまかり

たりけるにおとこの心かはりてつ

ねにはしたなめければみやこ  
なるおやのもとへつかはしける

読人不知

うちたのむ人のこゝろはあらちやま

こしちくやしきたひにもある哉(603)

「(81丁オ)

【頭】六帖云／ヒトコ、ロアラチ／ノヤマニナルトキ／ソタノミ

コシチ／ノミチハクヤシ／キ

かへし

おや

おもひやるこゝろさへこそくるしけれ

あらちのやまの冬のけしきは(604)

おもふこと侍りけるころよめる

参議師頼

いたつらにすくる月ひをかそふれは

むかしをしのふねそなかれける(605)

かゝみをみるにかけのかはりゆく

「(81丁ウ)

をみてよめる

源師賢朝臣

かはりゆくかゝみのかけをみるたひに

おいそのもりのなけきをそする(606)

前太政大臣家に侍りける女を中将

忠宗朝臣と少将源國朝臣ともに

【頭】忠宗ハ京極大ノ殿孫 花山院ノ左大臣男ノ母播磨守藤ノ原

定綱（ママ）女号」大播万守源ノ国ハ国信卿ノ男

かたらひ侍りけるに忠宗朝臣に

あひにけりその、ち程もなく

「〈82丁オ〉

わすれにけりとき、て女のかりつ

かはしける

源國朝臣

こゆるきのいそきてあひしかひもなく

なみよりこすときくはまとか（ママ）（607）

藏人親隆かうふりたまはりて

【頭】但馬守隆方ノ孫参議正三位ノ大藏卿為房ノ男母法橋 隆尊女

またのひつかはしける

藤原公教

「〈82丁ウ〉

くものうへになれにしものをあしたつ

あふことかたにおりぬる哉（608）

堀河院御時源俊重式部丞ま

【頭】俊頼男

うしける申文にそへて中納言

重資卿の藏人預にて侍りける

ときつかはしける哥

源俊頼朝臣

ひのひかりあまねきそらのけしきにも

「〈83丁オ〉

我身ひとつはくもかくれつ、（609）

これを奏しければ内侍周防を

めしてかへしせよとおほせ事あり

ければつかうまつれる

【頭】散木集詞云ノコレヲ御ラムシノテ内侍周防ヲメノシテコレ

カヘシセノヨト仰ラレケレノハ心ハイカヤウニカノサモサ

フラヒヌヘカノラムサマニカシ候ノヘキト奏シケレハサヤ

ウニコソハト仰ノコトアリケレハツノカウマツリケル云々

ノソノタヒナリニケノリ云々

周防内侍

なにかおもふはるのあらしにくもはれて

さやけきかけはきみのみそみむ（610）

「〈83丁ウ〉

金葉和詞集卷第十

雑部下

公實卿かくれ侍りてのちかの家に

まかりたりけるに梅花さかりに

さけるをみてえたにむすひつ

けゝるうた 藤原基俊

むかしみしあるしかほにてむめかえの  
はなたに我にものかたりせよ (611)

「(84丁オ)

おりたかへたるはなさくら哉 (614)

北方うせ侍りてのち天王寺にま  
いりけるみちにてよめる

六条右大臣

かへし

中納言實行

ねにかへるはなのすかたのこひしくは  
たゝこのもとをかたみとはみよ (612)

人々あまたくして花みあるきて

のちかせおこりてふしたりける

に人のもとよりなにごとかとたつ

ねて侍りければいひつかはしける

平基綱

「(84丁ウ)

はしける

康資王母

うかりしに秋はつきねとおもひしを

ことしもむしのねこそねなかるれ (616)

下臈にこえられてなけき侍り

けるころよめる

源俊頼朝臣

さくらゆへいとひしかせのみにしみて

はなよりさきにちりぬへき哉 (613)

後三条院かくれおはしましての  
ち五月五日に一品宮御帳にさう

ふゝかせ侍りけるにさくらのつくり

はなのさゝれたるをみてよめる

律師實源か許に女房の佛供養

あやめ草ねをのみかくるよのなかに

「(85丁オ)

せむとてよはせ侍りければまかり  
たるに手筈を布施にしたり  
けるをかへりてみければかきて

「(86丁オ)

「(85丁ウ)

いれたりける哥

讀人不知

たまくしけかけこにちりもすゑさりし  
ふたおやなからなきみとをしれ (618)

「(86丁ウ)

とふことのはにおきそゐらるゝ (621)

「(87丁ウ)

おほちにこそすてゝ侍りけるを  
しくゝみにかきつけて侍りける  
哥

みにまさるものなかりけりみとりこは  
やらむかたなくかなきしれとも (619)

阿波守知綱にをくれて侍りけるこ  
ろなかされたりける人のゆるされ  
てかへりたりけるをきゝて読る

「(87丁オ)

藤原知信母

【脚】一首／左馬権頭資／経女

なかれてもあふせありけりなみたかは  
きえにしあはをなにゝたとへむ (620)

こゝちれいならぬころ人の許より  
いかゝなど申たりければよめる

讀人不知

くれたけのふしゝつみぬるつゆの身は

範永朝臣出家したりときゝて

能登守にて侍りけるころ國より

いひつかはしける

藤原通宗朝臣

【脚】若狭守正四位下／前大貳従三位／経衡卿一男母／前筑前守

高／階成順女

よそなからよをそむきぬときくからに  
こしちのそらはうちしくれつゝ (622)

律師長済みまかりてのちそのあ  
つかひをしてありけるよゆめに

「(88丁オ)

みえける哥

たらちめのなけきをつみてわれかかく

おもひのしたになるそかなしき (623)

顯仲卿のむすめにをくれてな

けき侍りけるころほとへてと

ひにつかはすとてよめる

大蔵卿匡房

そのゆめをとほゝなけきやまさるとて

「(88丁ウ)

おとろかさでもすきにける哉 (624)

從三位藤原賢子れいならぬ事

【頭】号大貳三位為／高大貳成章／妻仍有大貳号／為家母也

ありてよろつこゝろほそくおほ

えけるに人の許よりいかゝなどゝ

ひて侍りければよめる

藤原賢子

いにしへは月をのみこそなかめしか

いまはひをまつわか身なりけり (625)

みまかりてのちひさしくなりに

けるはゝをゆめにみてよめる

権僧正永縁

ゆめにのみむかしのことをあひ見れば

さむるほとこそわかれなりけれ (626)

ひとのむすめのはゝの許へまかり

たりけるころをもきやまひを

してかくれなむとしけるとき

「〈89丁ウ〉

かきをきてまかりにける哥

読人不知

露の身のきえもはてるはなつくさの

はゝいかにしてあらむとすらむ (627)

小式部内侍うせてのち上東門

院よりとしころたまはりけるきぬ

をなきあとにもつかはしたり

けるに小式部内侍とかきつけ

られたるえおみてよめる

和泉式部

もろともにこけのしたにはくちすして

うつまれぬなをみるそかなしき (628)

したしき人にをくれてわさの

ことはてゝかへり侍りけるによ

める 平忠盛朝臣

いまそしるおもひのはてはよのなかの

「〈90丁ウ〉

うきくもにのみまじるものとは (629)

陽明門院かくれおはしましての

ち御わさのことはてゝまたのひく

ものたなひけるをみてよめる

藤原資信

【脚】大蔵大輔永／相男陽明院／藏人興福寺三／綱禅度祖父

さためなきよをうきくもそあはれなる

たのみしきみかけふりとおもへは (630)

白河女御かくれたまひてのち

「〈91丁オ〉

かの家の南おもての藤花さかり  
にさけるを見てよめる

僧正行尊

草木まてなけきけりともみゆる哉

まつさへふちのころもきてけり (631)

兼房朝臣重服になりてこもり

る侍りけるに出羽弁の許より

とふらひたりけるをかへしせよ

「〈91丁ウ〉

とまうしければよめる

橘元任

かなしさのそのゆふくれのまゝならば

ありへてひとにとはれましやは (632)

範國朝臣にくして伊豫國にまか

【頭】資業卿為伊豫守之時与能/因法師/ 武蔵守行義男(ママ)

/ 母致明女/七番 龍宮祈雨/ 左 能因/アマノカハ

ナハシ/口水ニセキクタセ/アマクタリナス/カミトシル

ヘク 終七字/ 相違如何/ 右 資業/アマノカハ

水セキ/クタスカミナレハ/アメノシタニハ/アフクトヲ

シレ/範國資業何/一定哉依早/祈雨云々又哥/合題龍宮  
祈/雨云々何一定乎

りたりけるに正月より二三月まで  
いかにも雨のふらさりければ苗代  
もせてさはきければよろつに

「〈92丁オ〉

いのりけれとかなはてたへかた  
かりければ守能因哥よみて一宮  
にまいらせていのれとまうしけ  
れはまいりてよめる

能因法師

あまのかはなはしろみつにせきくたせ

あまくたります神ならばかみ (633)

神威ありて大雨ふりて三日

「〈92丁ウ〉

三夜おやまさるよし家の

集にみえたり

心経供養してその心をひとく

によませ侍りけるついでに

攝政左大臣

いろもかもむなしと、けるのりなれと  
いのるしるしはあるとこそきけ (634)

法文のありけるをさとなる女房の

「〈93丁オ〉

させたまひてさとなりける女  
房のもとへいひつかはしける

選子内親王

みやにまうさすともしのひて  
とりてをこそよとまうしたり  
けるをきゝてよませたまへる

三宮

あみたふとゝなふるこゑに夢さめて  
にしへなかるゝ月をこそみれ (638)  
法花経の心をよめる

「〈94丁ウ〉

みしまゝにわれはさとりをえてしかは  
しらせてとるとしらすらめやは (635)

皇后宮肥後

月のあかゝりけるよ瞻西上人の  
許へいひつかはしける

「〈93丁ウ〉

をしへをきていりにし月のなかりせは  
いかてこゝろをにしにかけまし (639)

僧正行尊

清海聖人後生をなをゝそり (ママ)  
おもひてねふりいりたるにま

いさきよきそらのけしきをたのむ哉  
われまとはすな秋のよの月 (636)

くらかみに僧のたちてよみかけ  
ける哥

實範聖人山寺にこもりぬときゝ  
てつかはしける

「〈95丁オ〉

静厳法師

ちりのうたかひのこさすも哉 (640)

こゝろにはいとひはてつとおもふらむ  
あはれいつくもおなしうきよを (637)

「〈94丁オ〉

普賢十願の文に願我臨欲命終  
時といへることを読む

覺樹法師

八月許月あかゝりけるよ阿弥陀  
のひしりのとをりけるをよはせ

【脚】一首／六条右大臣顯／房男号東南／院已講  
いのちをもつみをもつゆにたとへけり

きえはともにやきえむとすらむ (641)

弟子品のこゝろをよめる

僧正静円

「(95丁ウ)」

【脚】一首／号木幡僧正園／城寺二条前太／政大臣男」母小式口

内侍

ふきかへすわしのやまかせなかりせは

ころものうらのたまをみましや (642)

提婆品の心をよめる

瞻西聖人

【脚】鎮西人云々山／法師号雲居／寺聖人

のりのためになふたきゝにことよせて

やかてうきよをこりそはてぬる (643)

皇后宮権大夫師時

けふそしるわしのたかねにてる月を

「(96丁オ)」

たにかはくみしひとのかけとは (644)

不軽品の心をよめる

権僧正永縁

ありかたきのりをひろめしひしりこそ

うちみしひともみちひかれけれ (645)

涌出品のこゝろをよめる

たらちねはくろかみなからいかなれば  
このまゆしろきいとゝなるらむ (646)

「(96丁ウ)」

薬王品の心をよめる

懷尋法師

うきよをしわたすときけはあまをふね  
のりにこゝろをかけぬひそなき (647)

人許に経供養しけるに五百弟

子品のこゝろをときけるに解寶

珠のたとひときけるをきゝてた

うとかりつるよしのうたをよみて

「(97丁オ)」

かつけものゝうらにむすひつけて

侍りけるをみてかへしによめる

権僧正永縁

いかにしてころものたまをしりぬらむ

おもひもかけぬ人もあるよに (648)

依他のやつのとひを人々よみ

けるにこのみかけろふのことしと

いへることをよめる

「(97丁ウ)」

懷尋法師

いつをいつとおもひたゆみてかけろふの  
かけろふほとのをすすくすらむ (649)

常住心月輪といへるこゝろをよめる

澄成法師

よとゝもにこゝろのうちになすむつきを  
ありとすることほるゝなりけれ (650)

醍醐の釋迦會にはなのちるを

みてよめる

珍海法師母

けふもなをおしみやせましのりのため  
ちらすはなそとおもひなさは (651)

地獄繪につるきの枝に人のつ

らぬかれたるをみてよめる

和泉式部

あさましやつるきのえたのたわむまで

こはなにのみのなれるなるらむ (652)

やまひしてかきりになりてまと

ひけれはしとみのもとにいれて

おほちにをきたりけるにくさの

つゆあしにさはりけるほとにほとゝ

きすのなきければいきのしたに  
よめる

田口重如

【脚】一首／山口重如也号／河内重如河内／国人也

くさのほにかとてはしたりほとゝきす

してのやまちもかくやつゆけき (653)

つゆにおちいりけるほとに読る

たゆみなくこゝろをかくるみたほとけ

ひとやりならぬちかひたかふな (654)

屏風のゑに天王寺の西門にて

みれば僧のふねにのりてにしさ

まにこきはなれてゆくかたかけ

るところをよめる

源俊頼朝臣

あみたふとゝなふるこゑをかちにてや  
くるしきうみをこきはなるらむ (655)

連哥

ゐたりけるところのきたのかたに

「(99丁オ)

「(98丁オ)

「(98丁ウ)

「(99丁ウ)

「(100丁オ)

こゑなまりたる人のものいひける  
をきゝて 永成法師

あつまうとのこゑこそきたにきこゆなれ

律師慶範

みちのくによりこしにやあるらむ (656)

桃園のもゝのはなをみて

頼経法師

もゝそのゝもゝのはなこそさきにけれ

「〈100丁ウ〉

公資朝臣

むめつのむめはちりやしぬらむ (657)

賀茂のみやしろにてもものつくを

とのしけるをきゝて

神主成助

【脚】賀茂別雷杜／神主従五位／上神主成実／男

しめのうちにきねのをとこそきこゆなれ

行重

いかなる神のつくにかあるらむ (658)

「〈101丁オ〉

宇治にて田のなかにおいたる

おとこのふしたるをみて

僧正深覺

【脚】九条右大臣／男号禅林／寺僧正

春のたにすきいりぬへきおきかな

宇治入道太政大臣

かのみなくちにみつをいれはや (659)

日のいるをみて

観暹法師

「〈101丁ウ〉

日のいるはくれなるにこそにたれけれ

平為成

あかねさすともおもひける哉 (660)

たのなかにむまのたてるをみて

永源法師

たにはむこまはくろにそありける

永成法師

なはしろのみつにはかけとみえつれと (661)

「〈102丁オ〉

かはらやをみて

読人不知

かはらやのいたふきにてもみゆるかな

助俊

つちくれしてやつくりそめけむ (662)

つくしのしかのしまをみて

為助

つれなくたくるしかのしまかな

「〈102丁ウ〉

みをまきたりけるをみて

神主忠頼

ちはやふるかみをはあしにまくものか

和泉式部

ゆみはりの月のいるにもおとろかて (663)

これをそしものやしろとはいふ (666)

宇治へまかりけるみちにひころ

源頼光かたちまの守にて

あめのふりければ水のいてゝかも

ありけるときたちのまへにたけ

「〈104丁オ〉

かはおとこのはかまをぬきて  
手にさゝけてわたるをみて

頼綱朝臣

かはといふかはのあるよりふねの  
くたりけるをしとみあくるさふ

かもかはをつるはきにてもわたるかな

「〈103丁オ〉

らひしてとはせければたてと  
まうすものかりてまかるなりと

信綱

いらふるをきゝてくちすさひ  
にいひける

かりはかまをもおしとおもひて (664)

あゆをみて

源頼光朝臣

讀人不知

【脚】攝津守正四位／下前攝津守／從四位上滿仲／男母近江守從

なにゝあゆるをあゆといふらむ

／四位下源俊女／如本

匡房卿妹

たてかるふねのすくるなりけり

「〈104丁ウ〉

うふねにはとりいれしものをおほつかな (665)

和泉式部賀茂にまいりけるに

「〈103丁ウ〉

これを連哥にきゝなして

相模母

わらうつにあしをくはれてか

あさまたきからろのをとのきこゆるは (667)

すまひくさといふものゝおほかり  
にければひきすてさせけるを  
みて

読人不知

ひくにはつよきすまひくさかな

「105丁オ」

とるてにははかなくうつるはなゝれと (668)

とりをのきにさしたるかあめに

ぬれけるをみて

あめふれはきしもしとゝになりにつ

り

かさゝきならはかゝらましやは (669)

みのむしのむめのはなのさきた

るえたにあるをみて

「105丁ウ」

律師慶暹

【脚】前律師蘭城寺／祭主神祇大副／大中臣元房孫／権大宮司公

宣／男

むめのはなかさきたるみのむし

まへにある童

あめよりはかせふくなどやおもふらむ (670)

たきのをとのよるまさりてきこ

ゆるをきゝて

読人不知

よるをとすなりたきのしらいと

「106丁オ」

くりかへしひるもわくとはみゆれとも (671)

はしらをみて

成光

おくなるをもやはしらとはいふ

観暹法師

みわたせはうちにもとをはたてゝけり (672)

七十になるまでつかさもなく

よろつにあやしきことをおもひ

「106丁ウ」

つゝけてよめる

【頭】散木集云／此集撰ノ奥ニ／御覽モセヨト／オホシクテ書／

付云々

源俊頼朝臣

なゝそちにみちぬるしほのはまひさ

きひさしくもよにむれぬるかな (673)

「107丁オ」

【頭】連哥之奥出／来如何無其故／坎又述懷坎／無下藝也不似／

奏上議

白紙

〈107  
丁ウ〉